らの具現を見るであらう。

これは、然しながら「積極的防空」の範疇に歸屬するものであるから、又日を異にして物語らるべきである。普通「防空」といはゞ、專ら「消極的防空」――〉La défense passive〈を意味するものゝやうである。市民が束となり、性の差別をさへ超越し、「恐怖の働き」を可及的小範圍に壓縮し、社會的カタクリズム〔混亂〕の勃發を未然に防止しようとする必死の大衆的―社會的運動が、即ち「消極的防空」のすべてゞある。

■ 航空地理學的に觀察し日本は果して難攻不落てあり得るか

〔A〕 ウラヂオストツク―東京間の往復距離は二、四〇〇粁に達してゐることを指定し、「かかる遠距離の基地より空襲を開始する事は、頗る絶望的のものであると考へられる[2]」〔オツト・テイン〕とか、「日本は海上および陸上における假想敵國の勢力中心より、非常に遠隔な場所に位してゐることは、日本にとつて戰術上、少からず有利な立場にあることを發見した。海上より日本を攻撃する事は困難である[3]」〔フオン・ビューロウ〕とかの說が行はれ、日本は航空地理學的の觀點より有利な地位を占めるゐる事實が、外國評論家の間に、あまねく是認せられてゐたのであつた。またこゝに、かのウイリイ・ヘルパツハのいはゆる〉Die geopsychischen Tatsachen〈〔地理心理學的事實[4]〕の働きかけてゐることを觀察し、「日本は屢々地震に馴られてゐるので、空襲に對して歐洲人ほどに感じないかのやうに見える」と想像した外國人さへもがあつた。――これ等の諸事實を基礎として、フオン・ビューロウは一九三四年〔昭和九年〕わが國で擧行せられた防空演習を批判して、「防空觀念を普及するに止まらず、防空運動についての實際的處置に順れしめる目的としては、未だなほ、その規模が小に過ぐるものが認められてあらう」と斷じ、日本人が歐洲人ほど敏感に、「消極的防空」を關心事としてゐないことの證據とした[5]。

まことにのどかな記述の一くさりではないか。果して然りとすれば、日本は世界を吹き捲る颱風をよそにして、悠久のエチオピヤ的夢を結び續け得たことであらう。またかうしたオプイミストの群像が、市井の一隅に見出されたことも無いではなかつたのである[6]。

しかるにオツト・テレンは、すでに一九三四年〔昭和九年〕の頃、「日本の主要生產地帶に對するロシアの空襲は、專らウラヂオストツク基地ないし北方海岸から開始せられるであらう。最

高速度 205km/h の爆撃飛行機を以てすれば、短少な攻撃時間を考慮に容れ、風位又は天候如何を無視して往復十時間を以て敢行し得られるのである。最高速度 350km/h を發揮する高速度輕爆撃機によると、更に七時間ほど短縮することが出來る[7]」と警告してゐるのであつた。――また この年にマクス・ドケイセルは、「日本は軍用航空の重要な事を理解してゐる。その集團地は甚しく犯され易く、二、五〇〇粁の航續力を有し、從つてシベリア沿海州から發翔して日本の都市攻撃に赴き、優にその基地に歸航し得る四發動機附のソヴイエート機を以て、意のまゝに行動せられ得るのである。主なる工業中心地にして、海岸に位するものは、容易に目星をつけられる[8]」と論じてゐるのであつた。

別に、これ等外國論者の提説によつて哲蒙せられた譯ではないが、かの關東大震災による慘禍の追憶の未だ生新しい國民ではなかつたか。それに馴らされて、空より來る衝撃に對しては鈍感となるといふが如きは、金輪際、考へられないところである。それどころか、ウイリイ・ヘルパツハの考ふる通り、中樞神經系統と感覺との二途を通じ、我國の變幻極めて多き氣象・溫度及び土地柄と、急流あり濕布おほく、常に「動的」な我國の風景とが、わが國民の精神生活を刺戟すること一方ならず、いやが上にも、これを敏感ならしめねば止まなかつたのである。この時、獅逸のフオン・ビユーロウが、そのかゞやける論稿において「赤色空軍の最も優れた部分は、今や極東において出されてゐる」のみか、「こゝに若しイタリーのドウェ將軍の理論にしてその一般的適用を求めるならば、さし當り東部ヨーロツパにおいて準備せられつゝある『空間の武器』を以て、その道具とするであらう[9]」と述べてゐる。――知らず、これ等の言説は、果して何人に對する警告として聽くべきであつたらうか。そして日本人は、果してこれ等の言説を、馬耳東風に聽き流すほど鈍感であり得たであらうか。

2) ＞Luftopertive Unternehmungen im weiten Raum＜ Deutsche Luftwehr. Bd. 1 Nr. 11.
3) ・＞Das Luftproblem im pazifischen Raum＜ Deutsche Luftwehr Bd. 1 Nr. 2.
4) Geopspchische Erscheinungen, 1923. Leipzig.
5) ＞La Tension en Extrem-Orient＜ La Revue Maritime. No 176 Août 1034.
6) Vou Bülow. ＞Das Luftproblem＜
7) Otto Thelen, ＞Luftoperative＜

8) 〉L'Aviation Japonaise〈 L'Aviation Française, No. 14/Feb. 1934.
9) 〉Luftpolitik und Luftrüstungen in Europa〈 1934. Luftwehr. Bd. 1 Nr. 10.

〔B〕フォン・ビューロウが、海上より日本を攻撃することは困難であるといふたのは、少くとも全長七、〇〇〇粁に達する「汎米航空路會社」が、その業務を開始しない前であることを忘れてはならぬ。それでビューロウは、「航空母艦より開始する行動範圍の廣さは、陸上より試みられるそれに比較して常に局限せられてゐる。故にアメリカは、支那において空襲を開始する起地の設立を目論見たのである。最近パラドツクスのやうに響く新計畫が傳へられてゐる。――それは卽ち大洋上に、陸上飛行機の離着可能な裝置を營むといふ目論見である。最近アメリカの專門雜誌は、屢々太平洋上に『飛行機プラットフォーム』を建設するといふ觀念を鼓吹し、痛く日本に不安を感ぜしめてゐる。このプラットフォーム〔『F・P・1應答なし』[10]と題するフキルムを見るがよい〕も、アメリカの綱領によると、たゞ陸上機を使用し、大洋を越えて商業航空を營むといふ平和的課題を解決することを目的とするに過ぎない。然しながら戰時に際し、それが軍用に供せられた曉には、日本が太平洋上における覇權の維持について、忽ち不安を感ずるのも當然のことであると見られる。實際、かうした『浮き島』が設置せられたが最後、前述、日本が占めてゐる地理學的ないし地理學的關係から樹立せられる政策的立場は、立ちどころに影響を受けるであらう。日本は、かゝる人工的『浮き島』設置に關する計企を目して挑戰的のものであるとなし、その執り得るあらゆ手る段を以て、それに對する防禦を講ずることは確實である[11]」と――幸ひにしてこのアメリカ設計はペーパア・プランに了り、「浮き島」は實現しなかつた。そのかはり「浮ばざる島」――卽ち「プランス中軍艦の淺瀨」と呼ばれてゐる珊瑚礁及びミツドウエイ、ウェーキ、その他の多角形的島嶼群に飛行機の離着裝置を施し、ハワイを核心として、こゝにアメリカの前進根據地が形作られてあつた〔!〕。そしてV・バルジョウのいふ如く「飛行艇のお蔭でミツドウエイ島やその附近及び中間に散在する珊瑚礁は、太平洋上における米國の組織的防禦の樞軸たるハワイ群島の防禦を强化するものである」といひ、「かくして今日まで不毛であつた諸島嶼の利用によつて、航空はアメリカをして太平洋中央における組織的防禦を强化せしめるであらう。――この組織的防禦の樞軸は、ハワイ島において構成せられてゐるのを想起する[12]」こと

を餘義なくされたのである。

V・バルジョウの言葉は、然しながら一のパラドックスとして聽くべきである。その「防禦」といへるは、これを積極化して「攻撃」と、ひつくり返して解釋することが、可能であることを忘れてはならない(!)。それで理論上、アメリカは以上の「浮ばざる島」――即ち太平洋上の前進根據地たる諸島嶼のほかに、「浮べる飛行甲板」――即ち航空母艦よりする空襲の可能性を持つ。フオン・ビユーロウは算定して、「四隻の航空母艦(『サラトガ』『レキシントン』『レーンジヤア』及び『ラングレイ』)を合算すると飛翔一回分を以て、爆彈八二、八〇〇瓩を、敵に投下することが出來る譯である。更に一九三六年、二隻の航空母艦『ヨークタウン』および『エンタアプライズ』が追加せられ、それ〳〵一五、〇〇〇噸、確實に最高一〇〇噸までの爆彈搭載量を有たしめられるであらう」[13]と論じてゐる。

――以上の諸事實に鑑みて、曩に航空地理學的に論斷せられた日本の難攻不落說は、その後のめざましい航空機材の進歩と、「汎米航空路會社」の太平洋横斷線の完備と共に淸算し盡されたものといはねばならぬ。レオン・トロツキーは「日本を攻めることは不可能だといふ事實は、荒唐無稽な思想である、云々[14]」と無遠慮な放言をなしたが、事、「浮ばざる島」と「浮べる飛行甲板」を基地とする空軍の策動に拘はる限り、大陸より始められようが太平洋上より試にられようが、航空地理學上の日本難攻不落說は、すでに荒唐無稽のものに歸して了つた觀がある。

10) Hans Albers 〈F. P. 1, antwortet nicht…〉 UEA Film.
11) Von Bülow. 〈Drs Luftproblem〉
12) 〈Strategie aéro-navale dans le Pacifique 〉 La Revue Maritime 213, Septembre, 1937.
13) Vom Bülow 〈Luftproblem〉
14) 「日本は自殺するか」The Liberty 誌所載『講演』第二五一輯譯載。

Ⅳ　大陸より或は太平洋上よりする日本空襲は如何なる條件において敢行せられるか

先づ大陸方面よりの空襲に關してマクス・ドケイゼルは、日本が航空地理學上、難攻不落の立

場にある關係よりして、「日本帝國のすべての工業地帶は、ソヴイエト機の單に低劣な效率の例外的侵入および困難な實行のみが問題とせられてゐるのみである」[15]と、極めて樂天的觀察を下し次に太平洋方面よりするそれについて、フォン・ビューロウは「米國の各航空母艦は、これを一齊に日本諸島の攻撃に使用し、すべての艦載爆撃機を同時に飛翔せしめ、協同爆撃に從事せしめ得る狀態にあるとは信ぜられない。……しかも亦攻撃に從事する航空母艦の爆撃機隊は、日本の頑强な軍國民に對し、これを決定的・實際的に意氣沮喪せしめようとしても、その效果は、遂に薄弱なものとなるであらう」と說いてゐる。

著者は軍事の專門家ではないから、輕々に、以上の提說の當否を決定する譯にはゆかないのである。たゞ外國人批評家の諸說を示して讀者の判斷に任せると共に、大陸方面より來る空襲が單に低劣な效率の例外的侵入であらうとも、太平洋方面より來るそれが日本の頑强な軍國民の阻止に遭ふとも、少くとも日本の都市における物體的機構は、「防空」の觀點より、極めて脆弱な素材から成つてゐる。それが故に、理論上、よしんば低劣な效率の例外的侵入であつても、「警防團」その他頑强な軍國民の必死の作業があつたにしても、日本の物體機構の脆弱な素材――卽ち木造といふ弱點は、遂に敵の燒夷彈をして、得て遺憾なく、それの效果を擴充せしめるに足るのである、といふ事實を特に强く指摘して世人の注意を促したい。

極めてしつかりした日本の人的機構ではあるけれども、物的機構の脆弱よりして施すべき術なく、こゝに「恐怖の働き」を捲き起すことのなきを保しないのである。かくして熱烈な防空訓練を重ねるにも拘らず、實際において、平生、何等備ふるところなきものと同樣の結果を招來するにおいては、それこそ完全な non sequitur〔辻褄の合はないこと〕といふべきではないか。

15) ＞L'Aviation Japonaise＜
16) ＞Das Luftproblem＜

Ⅴ　東京市民は先づ何事を深憂すべきか

しつかりした日本の人的機構なるに雁行せず、何故に日本の物的機構は、かくも脆弱なのであ

るか。それの考察は後段にゆづるとして、ともかく空襲の一角より觀じて、日本の家屋は全然無抵抗の狀態においてためらひ、低劣な效率をしか有するに過ぎぬ敵機の侵入に際會しても、忽ち「恐怖の働き」を捲き起して、こゝに想像すべからざるカタストロフを現出するに至るのであらうことは、何人も深憂せねばならぬところである。

フォン・ビューロウは「現今日本家屋の構造が、薄弱素材から成立してゐるので、爆擊の良い食物となつてゐるから、この點につき、遙かに用意周到な防空計畫の必要が考慮せられてあらねばならぬ[17]」といひ、またマクス・ドケイゼルも、「日本の都市及び村落の發展は燃燒し易い材料を以て建造しあるが故に、火災の延燒を容易ならしめ、爆擊が不正確であつてさへも、恐るべき收獲を確保せしめるに至るであらう[18]」とのべ、われ等に警告するところがある。――この警告こそは親切なる警告として、われ等の三省を促すに値するものがあらう。われ等は、しかなしながら三省しても四省しても、木造家屋が 3,000°C の熱を發する燒夷彈に對してはおろか、蠟燭・燐寸さては煙草の吸殼に對してさへ、全くの無抵抗性であるのは、如何にしても否定することの出來ない事實なのである。

木造家屋なるが故に、それの機構は極度的脆弱であつて、季節的に吹く烈風に際しても、さながら帆船の裝具のやうに、不氣味な音響を立てゝ軋るのである。それ以上の强度を有する颱風に際しては、屋根は捲き取られ、他愛もなく根こそぎに倒潰するに至るであらう。よしんば天變地異に對しては不可抗的であつても、毎年季節的に約束せられてゐる氣象學上の變調ぐらひに對して些の微動を感ぜず、晏如として家族的 intimité[19] を滿喫し得ればこそ、こゝにはじめて「家屋」といひ得られるのである。何のための「屋根」なのであるか。屋根にこそ、家屋の本質と意義が見定められ、また魂が罩るのである。何となれば「こゝには被覆があり、心の全部と同情が集中せられるからである。『わが屋根の下』といふ言葉と、『わが壁の内に』といふそれとを比考するがよい。誰でも直ぐに屋根の重要性を意識し、われ等の快樂の大部分は、屋根の下において生ずることを知るであらう[20]」と。――機構の堅固と被覆〔屋根〕の確實と、これ等の諸條件を具備せざるものは、すでに外表的―内容的に「家屋」ではあり得ない。換言すれば「ビルディング」にあらず、「エディフアイス」にもあらずして、おしなべてそれは「コツテージ」若しくは「ヒュツテ」であると考へられよう。愛すべきわれ等の帝都ではあるが、薄弱なる素材と脆弱な機構を

有する「コッテージ」若しくは「ヒュッテ」の帝都であるが故に、さながらひろ〳〵と開廣した面積に堆積せられた焚付の丘にも比考し得られよう。そしてマゾヒズムス患者のやうに、如何にも敵燒夷彈の好餌となり度げな顏つきで、最後の運命を、從容として待ち設けてゐるの感がある〔！〕。

如何にも博物館・圖書館・公會堂及びオフィスの如き公共的性質に屬するものには、際立ちて見るべき建築も含まれてゐるやうである。然しながら世人は、こゝで須らくヂャン・ラスキンがエヂンバラ市民に對して試みた講演の一くさりを考味すべしである。——卽ち「特に諸君の都市が裝飾せられてあるのは、諸君個々の住宅によつてゞあつて、決して公共的建築物によるものではない。如何に美麗な公共的建築物を有しようとも、それが個々の住宅によつて支撐せられ調和してゐなければ何もならぬのである」[21]と。これを、このまゝわが東京市に施して見るがよい。上野の博物館・圖書館、丸ノ内のオフィス、それに霞ケ關に峙つ官廳の堂々たるに比較して、市民住宅の如何にみすぼらしきことよ〔！〕。ほんの雨露を凌げばよいといふ消極的滿足を以ち、かくもみすぼらしき住宅に晏如として、そして質實剛健を誇る封建人がありとするならば、それこそ飛んだ心得違ひといはねばならぬ。生命の危險を感じて、そも何の質實剛健であるか。東京市民は氣の毒にも、この焚付の堆積のほかに、その「尊嚴」を表現すべき住宅を有ち合はしてゐないのである。

木造家屋こそは地獄の門である。この門には、次のやうな銘がイタリー語で刻まれてゐるのを見よ。〈lasciate ogni sperenza, a voi ch'entrate[22]〉と。そして「防火擔任者」といふバントを肩に懸けた婦人群を地獄の只中に居殘らしめ、これをヂアンヌダルクたらしめんとは、人命あまりに輕きの感を深からしめるものがあるではないか。

17) 〈Das Luftproblem〉
18) 〈L'Aviation Japonaise〉
19) Walter Pater, Renaissance.〔The Modern Library〕P. 143
20) John Ruskin, Lectures on Architecture and Painting.〔The New Universal Library〕P. 27
21) Op. cit. p. 4.
22) 「こゝを通りしものは、何人といへども、希望を棄てねばならぬ」——Dante. 地獄の入口に書かれ

た言葉。

Ⅵ　消極的防空の最も主要なる目的は何か

「消極的防空」とはいふものゝ、それの目的を批判すれば、更に積極的—消極的の二差別の存することを忘れてはならない。

〔A〕消極的防空の積極的目的——敵空襲下にありて、生産工業能力を喪失せしめることなくこれを持續伸展せしめること。

〔B〕消極的防空の消極的目的——敵空襲下にありて、市民の闘志と志氣〔モーラル〕を喪失せしめることなく、パニックを可及的小範圍に食ひ止めること。

そして「消極的防空」の最も主要な目的はAである。Bは畢竟、Aの目的を到達せしめんがための手段に外ならぬ。

今まで幾度か防空演習が施行せられたが、その目的が果して遺憾なく、市民大衆の理解に徹底してゐたか、どうかは極めて大きな問題であらねばならぬ。市民は燈火を消せといはれるがまゝに燈火を消すのみ。何が故の燈火管制であるかを辨へてゐるものは少いのである。市民は燈火を消し、それがために生産機能を停止するが如きことあらば、それこそ敵機をして一箇の爆彈をさへ費すに至らしめずして、すでに空襲の目的を十分に達成せしめてゐることを忘れてはならぬ。とはいふものゝ燈火を管制し、そして作業を繼續してゆくことは、近代的裝置を施した大工場ならばともかくも、市内至るところに散在する小規模工場の疎惡なる木造コッテージを以てしては絶對に不可能である。素材が薄弱であり機構が脆弱である關係から、ほんの微少な氣象學的變調に對してさへ無影響であり得ず、普通の陽光にさへも端目板は反りかへり、柱に龜裂を生じ、壁や長押（なげし）との接續線に罅隙が生ずるのである。たとへ窓や戸口を遮蔽しても、直射光は家人にも警防團員にも氣づかれず、こゝを通じて漏洩し、敵機に好指標を提供してゐる景觀を、至るところに目撃することが出來るであらう。この直射光を遮蔽しようとすれば、家屋を根本的に改造せねばならない。家屋を根本的に改造せずして、そして燈火を完全に「遮蔽」しようとすれば、止むなく「遮蔽」にあらずして「消燈」し、敵は未だ一箇の爆彈をさへ投下せざるに、早くも生産を

停止するの外に、爲すべき術とてはなくなるのである。

この時、目標を定めざる燒夷彈にして投下せられんか、命中は不正確であつても、この焚付群は一齊に燃え上り、數十數百箇所に立つた火柱は同時に崩れて、さながら鴨長明の『方丈記』に記述するが如き「パニツク」狀態を現出するに相異がない。そしておそらく、人間としては再視するに忍びざる凄慘な破壞的景觀に接しても、それよく心氣を動かさず、また「ヒステリア」の根を有しない中性的の、例外的婦人群像の假りに居殘るあり、相携へて、かねて訓練せられしバケツを「リレイ」するやうな遊戯を開始しようとしても、その必要は、すでになくなつてゐるであらう。——これ等の勇壯なるヂャンヌダルクは、焚付を背負つた死體となつて冷却し、東京市は陰慘極まりなき被服廠跡と化して、そこに展開してゐるであらうから。

東京市は、焚付堆積である。市民は、その上を這ひ、その裏にひそむ蟻である。蟻が何事を目論見ようとも、この焚付に點火せられたが最後、すべては無駄である〔!〕。すべては悲劇に終るのである〔!!〕。

VII　戰爭技術と建築樣式は如何なる關係を維持するか

往時は戰爭技術と建築樣式との間に相互關聯が存在し、ひとり城廓のみならず、市民住宅から寺院に至るまで、當時における戰爭技術の何であるかを反映してゐた[23]、とハンス・ショッツベルゲルはいふ。それでアリストテレスもヴイトルヴユースも、それ〴〵當時における戰爭型態を、そのまゝ具現した都市計畫を打ち樹てたが、いづれも火器なき時代に屬するものであつた。イタリイの藝術家レオン・バテイスタ・アルベルチ〔1404—1472〕の如きもこれであつて、たゞ飛道具ないし弩を對象として都市計畫を樹立し、防火の觀點から見れば、最も危險な袋路次を數多く造つたのも、こゝに敵を追ひ込め、これを殲滅せんとする當時の戰技に職由するものであつた。中世紀となり、火器の進歩の特に著しきものあり、こゝに建築樣式の一轉期を來したのである。卽ち家屋の地面に接續する部分を石造となし、屋根は木材骨組とせるは、未だ空よりの脅威を知らない時代であつたからである。そして一群の家屋を、防火壁を以て圍繞する工夫さへもが凝されてあつた。けれどもつと直劍に、火器に對する都市防禦につき、考慮の拂はれたのは十五世紀

中葉頃であつて、さながら爆撃機の脅威に對し、現代人の致す苦心に肖似したものがある。

前に擧げたアルベルチは、畫家にして詩人であるが、こゝにこれと好一對なのは、獨逸の畫家アルブレヒト・デューラア〔1471—1528〕であつて都市計畫についての著述あり、[24]「火器の使用に對する組織的防禦を說ける最初の書物」といはれてゐる。——これに對比しておもしろいのはスイスの冥想的風景畫家アーノルド・ベツクリン〔1827—1901〕である。彼は、かのレオナルド・ダ・ヴインチの擧に倣ひ、既にオツト・リリエンタル〔1848—1896〕が鳥類飛翔に關する著述[25]を公にする以前、すでに鳥類の飛翔を研究し〔1885—6〕、更に「飛行機械」の設計に沒頭してゐたのであつた[26]〔1889〕。

藝術家は、その豐富な構想力を驅使して、こゝに防空及び飛行に關する諸技術の伸展を示唆するに與つて力あるが、そのアルファとオメガとは、依然として「現實」を離れないのであつた。カール五世の建築技師ヨアンニス・トマに言あり、「都市計畫の樹立と施行は、決してパデュアやボログナの專門學校で學ばれるにあらず、專ら戰爭と軍陣において修得せられる」[27]と。

ロンドンの木造家屋が清算せられ、不可燃ロンドンと代つたのは、一六六六年〔寛文六年〕の大火を契機としてである。「焰の弓」は、九月二日の月曜日より四日間にわたつて猛威を逞うし木造であつた全市の 4 5 を燒き拂つた。翌一六六七年には復興條令が發布せられ、ロンドン市民は不退轉の意氣を以つて再建築に着手した。同令により、家屋には若干の例外を設けて、大體四つの型(タイプ)が定められ、素材は石か煉瓦に制限せられ、かくして「規格に則つた煉瓦づくりのロンドン市は徐々と實現し、曾て有りしところの切妻屋根が錯綜した繪畫のやうなロンドンと、顯著な對照をなした[28]」のである。

大正十二年の大震災により、東京市の大部分は燒き拂はれた。そしてその後に出來た市民住宅は石か煉瓦と思ひきや、震災前のものよりも、はるか粗惡にして醜穢な木造「バラツク」であり、さも慘禍を滿喫し足らぬ氣に、到るところに建て連らねられ、濕疹(くさ)のやうに蔓延して、その際限を知らないのである。

23) Bautechnischer Luftschutz. Berlin 1934. S. 7

24) Etliche Undericht zur Befestigung der Stett, Schloss und Flecken. 〔Nuremberg 1527〕

25) Der Vogelflug als Grundlage der Fliegekunst. 1889.

26) Neben Meiner Kunst, Flugstudien, Briefe und Persönliches von und über Arnold Böcklin. Herausgegeben von Ferdinand Runkel und Carlo Böcklin, S. 167., S. 173- S. 179.

27) Hans Schoszberger, Op. cit S. 13

28) Ency. Brit. "London"

Ⅷ われ等は如何なる防空手段を工夫し戰時下における帝都の生産を維持すべきか

わが封建期において、江戸は再三、火災の慘禍を嘗めつくし、三年に一度の割合にて、大火を經驗せしめられたのであつた。それで當初の茅葺を瓦葺に改め、除地を作つて累燒を防ぎ、避難に備へ、或は塗屋・土藏造り等を奬勵して、防火に對する處置が講ぜられたけれども、その最も根本的なイデオロギーは、やはり東洋的の「あきらめ」を出でず、これに幾度となく觸れられるところの節儉の主旨と合流して、燒失しても何等惜しからぬ「假屋」若しくは「陣屋」の心持で家作を試みることを上策とせられた。——これでは防火といはうよりも、火に對する無抵抗主義であつて、こゝに東京の市民住宅が、石若しくは煉瓦等の不可燃的素材たり得ず、焚付家屋たることの遼遠な歴史的根源が見定められるのである。

英國人は、大火に遭遇してロンドンを不可燃的素材を以て構築したのに比し、わが國人は大火に遭遇すればするほど、いよ〳〵「あきらめ」の無抵抗主義を以てし、ます〳〵家屋の素材を薄弱なものたらしめてゐる。木造家屋こそは憎惡すべき封建的遺物であるのみか、また嫌惡すべき老子的の「あきらめ」と無抵抗主義と、そしてそうした宿命觀の産物といふてよい。——この時「日本家作に出生する子は、草木にあやかりて必ず智慧淺く、淡薄なり。石家作に出生する子は金石にあやかりて、必ず智慧賢く、達材なり」の理に基づき、石造家屋の建設を主張した本多利明や、帆足萬里[29]のやうな反封建的識者のあつたことを、こゝに錄しておく。

この社會機構より封建的殘滓にして芟除すべくんば、併せて木造の家屋も亦當然淸算せられて然るべきである。防空運動にして國民的のものならば、敵燒夷彈の效果をして擴充せしめ、敵空襲の目的をして完璧に近からしめる木造家屋こそ、須らく國民的のものと背反した異端的なものといふべきであらう。——木造の帝都である。この帝都の防空訓練は、石或は煉瓦その他の不可

燃的素材もて構成せられた諸外國都市のそれを模倣するのは、凡そ無意味な直譯ではないか。

結論として、われ等は如何なる防空手段を工夫し、戰時下にありて、如何にしてこの帝都の生産を維持すべきか。それは外でもない。――この帝都より、先づ「木」を清算すべきである。凡東そ京に關する限り、「木」を無くすることが防空の conditio sin qua non ではないか。「木」に代ふるに鐵筋コンクリートを以てし、「コッテージ」若しくは「ヒュッテ」を「ビルディング」或は「エディフアイス」とし、たとへ空襲下にあつても、市民をして平常通り、60～75の脈搏を打たせ、その生産能力を維持せしめることに、防空の重要課題が見定められるのではないか。この間の演習は訓練であつたからして空よりの脅威とてはなく、ヒステリアにして「恐怖の働き」にまで擴大するものとてはなかつたやうである。その代りラッシュ・アワアにおける「市民の脚」は硬化し、血壓〔乘客數〕の昂進によつて適應性を減じ、ほんの訓練であつたのに、早くも破綻を來した交通動脈はなかつたらうか〔!?〕。

29）『西域物語』卷上、『東潛夫論』卷上參照。

思想宣傳戰の哲學

„Go ye into all thd world and preach the gospel to every creature."
〔Mark XVI. 15〕

一　「思想宣傳戰」といふ言葉は、過ぐる歐洲大戰頃より使はれかけたものである。それ以前にも、思想宣傳戰の事實はあつたが、さうした言葉は未だ存在してゐなかつたやうである。〔例へば明治三十八年、帝政露西亞の第二太平洋艦隊が、東航の途次、シンガポールに寄港して通路を津輕海峽に執るか、對島海峽を選ぶかにつき、我が聯合艦隊を欺罔しようがために、いろ〳〵の、「デマゴーグ」を飛ばしたが如き、これである〕。「思想宣傳戰」といふと、如何にも嚴めしく聞えるが、これを獨逸語でいひ現はすと〈propagandieren〉の一字につく。――プロパガンダといふ以上は、大量の、若しくは微量の「虚僞」が、そこに包隱せられてゐることはいふまでもない。勿論若干の「事實」〔眞理〕も、そこに含有せられてはゐようけれども、それは畢竟、幾パ

ーセントかの虚僞を欺罔しようがための道具立にしか過ぎないのである。かうした「虚僞」を措定し、これを根源として、對手國若しくは第三國人民の心機に何等かの轉形を招來せしめ、少くとも自國に有利とする「環境」を創始するのである。「虚僞」の措定より、或種の「環境」の創始へ。――こゝに「思想宣傳戰」のアルファとオメガとが見定められてゐる。

由來、われ〳〵が物事を思惟するといふことは、與へられたる素材を基礎となし、われ〳〵獨自の「ヒポテーゼ」によつて、これを或種の「對象」に――即ち「存在層」に構成することの外の何ものでもあり得ない。「ヒポテーゼ」そのものは、すでに批判的考察の限界外に立ち、超然としてその存立を誇つてゐる最後のものである。それが故に「思想宣傳戰」のつけ込みどころは、實にこの「ヒポテーゼ」を戰ひ取ることそれのみに極まつてゐるのである。ニュートンが〈Principia Philosophiae〉において、この「ヒポテーゼ」〔ハイポセシス〕なるものゝ特質を明かにして「現象から演繹せられたものはハイポセシスではない。それが形而上的なると物理的なるとを問はず、潜勢力と機械力とのいづれを豫想するかを論ぜず、ハイポセシスは經驗哲學中に存在しない。然るに定理〔プロポジション〕は經驗哲學に屬するものである。……萬有引力說は定理であり、現象から演繹せられたものである」と說く。偉大なユダヤ人アインシュタインの「相對性原理」は、定理に屬する萬有引力說の絶對性に破綻を來さしめたのである。〔ニュートンよりの引用並びにアインシュタインに關しては、Cf. Wildon Carr, The General Principle of Relativity in its Philosophical and Historical Aspect. 1920. p. 75—95〕。まして自然から演繹せられず、形態なき「ヒポテーゼ」を破壞し、また創造する營みは、あまり偉大ならざるユダヤ人でもよく爲し能ふところなのである。「ヒポテーゼ」は「形態」なきものであるだけに〔hypothesis non fingo〕、人心に喰ひ込むこと端的であり、深刻であり、染着して、その人の第二の人格を鎔鑄して了ふのである。それが故にわれ〳〵が批判のメスを、既成の「對象」と「存在層」とに擬するのみでは未だ末梢的考證たるに止まり、われ〳〵はなほ「思想宣傳戰」によつて與へられ、措定せられた「ヒポテーゼ」の走狗たることより淸算せられることはむつかしい。われ〳〵は須らく批判のメスを逆手に持ち、われと我が「ヒポテーゼ」の根を掘り返すべしである。かくしてこれに再吟味を加へる聰明性〔自己批判〕を具備し得た時においてのみ、はじめて敵の挑みかけた「思想宣傳」のほの闇い魔手を撥ね飛ばし、芳しからぬ敵の送物を突き返すこと

が可能たり得よう。だがしかしいづれの國にありても、自個批判を試み得る哲學者は少く、多くは與へられた「ヒポテーゼ」――その悉どすべては學的ではない。從つて批判的なり得ず。所謂正體の知れざるもの――を措定し、これを機抒として或種の「對象」と「存在層」を創始し、或種の「歴史」を編纂し、これを絶對の「眞理」として「享け容れてゐる」〔annehmen〕。一般大衆が把握し、迷信的狂熱を以て執着する「對象」と「存在層」と、そしてそれを根源性として編み出された「歴史」性とには、それだから「虚僞」が、極めて高いパーセンテージにおいて内包せられてゐるのも怪しむには足りないのである。

「虚僞」は「虚僞」として、それ獨自の世界を有つ。それは「現實を超越したところの一秩序」であつて、カール・マンハイムのいふ「ユートピイ」である。マンハイムに從ふと、歴史の歩みは「トーピイ」〔現實の既成秩序〕より「ユートピイ」〔非現實の秩序〕へすゝみ、また次の「トーピイ」に至るものである。〔Vgl. Ideologie und Utopie. 1930. S. 169 ff.〕。人間は「ユートピイ」の産物であり、それによつて既成のイデオロギーを爆破して、既成秩序の更改を促進して止まないのである。思想宣傳戰は、對手國或は第三國の人心に、「ユートピイ」〔たとへばヒューマニズムとか、超平和主義とか〕の種子を蒔き、それの萠芽を俟ちて既成イデオロギーと秩序とを根こそぎに爆破し去り、少くとも自國に有利とする「環境」――即ち新「トーピイ」〔たとへば厭戰的な〕を創始する。ユダヤ人が、世界を征服する手段の一はこれであつた。

二　虚僞の「ヒポテーゼ」を對手國の、若しくは第三國の、〔時としては現下の反樞軸諸國及び重慶政府の如きは自國の〕大衆に植え付けるのには、こゝにユニークな「宣傳技術」の驅使を必要とするものである。されど重慶政府のそれの如く、即時に、或は時日の經過とゝもに、「虚僞」と看破せられ、暴露せられるが如きは、最も劣等のものに屬す。また「事實」を事實としてありのまゝに具陳するは、無「技術」であり、あまりもプロザイツクであつて迫力を缺き、その效果は、或は期待するほどのものではないかも知れない。むしろ「事實」の幾パーセントかを明示し、明示せざる殘餘の諸「事實」を、それの幾層倍かに相當するほどの大きさに想像せしめるやうに示唆する宣傳こそは、最も詩的であつて、その迫力をぞんぶんに、奔放に發揚して底止するところを知らないのである。〔東洋的の言葉でいはゞ「餘韻嫋々」たるものがそれである〕。ここに5の「事實」があつて、その2だけしか明示せられてゐないとする。しかも「宣傳技術」そ

のよろしきを得れば、殘餘の3の「事實」を幾何學的級數において增大せしめ、これを6, 12, 24……の等比において「享け容れしめる」であらう。更に宣傳の抑揚高きを加ふるにつれ、更に9, 81, 6561,……の累級數において、これを享け「容れしめる」ことさへ可能なのである。――平戰兩時を問はず、このユダヤ的叙述が、如何に思想宣傳の效果を擧げ、現實的の利益を招來するに敏感であるかは、眞に思ひ半ばに過ぐるものがある。

いづれにしても5の「事實」を、5だけに享け容れしめることは、あまりに上出來の策といはれぬのみか、相手によりては、これを幾パーセントか割引して「享け容れる」ことを忘れてはならぬ。ノモンハンにおけるわが陸空軍の燦然たる戰果は、儼として動かすべからざる「事實」なるにも拘はらず、外國人中には、とかくこれに對して懷疑的の態度を執るものゝあるは、一にかうした心機から來るものか。わたくしはその端的な例證として、〈The Aeroplane〉〔July 19, 1939〕に掲載せられたる「日本人の想像」と題する無署名の一文を、こゝに指摘するであらう――これは蓋し、英國人一般の考方を代表せるものと見てよかるべく、彼等は、天地に俯仰して恥ぢざる我が「事實」を、「想像」として享け容れるほど、その判斷は昏盲に歸してゐるのである〔!〕。

さて「獨逸空軍は去る九月二十七日行動を起し、北海海上に於ける英國艦隊に對して爆擊を敢行せり。效果の顯著なるものあり。特は英航空母艦『アーク・ロイヤル』は爆沈せるものと認む」と報道すれば如何。これは餘りにプロザイツクな、――然り、餘りにも「道德的」な報道であつてまた何人の迂愚か、その「爆沈せるものと認む」といへる句に、若干の不安が包藏せられてゐることを看過したであらう。ユダヤ人を放逐せりとはいへ、なほユダヤ學によつて醞釀せられたところのユダヤ・イデオロギーを蟬脫し切れない獨逸は、決して左樣なプロザイツタな、そして「道德的」な報道を爲さなかつたのである。獨逸は放送して「若し英國民にして二十七日の我が爆擊による損害なしと主張するならば、須らく當局に對し、航空母艦『アーク・ロイヤル』は今いづれにありやを問ふべし」とやつた。――「爆沈せるものと認む」といふ表現上のマンネリズムよりも「今いづれにありを問ふべし」ときめつける方、はるかに辛竦にして效果的であり、われ等無關係の第三國人の腦裡にすらも、まさか「アーク・ロイヤルは今正に海底にあり」とも答へられず、苦楚煩悶せる英海軍當局の橫顏が、あり〳〵と素描せられて氣毒である。〔若し該艦の

爆沈にして眞實なりとせば〕。そして曩に「カレジアス」を喪失し、今また「アーク・ロイヤル」を爆沈せしめられた英國艦隊の、みすぼらしき「對象」と「存在層」を描出するのである。〔更にこの稿執筆當時、英政府は戰艦「ロイヤル・オーク」が撃沈せられたことを公表し、またついで『ベルリン十月十四日發同盟』は英國最大の戰艦「フード」の損傷を傳へてゐる〕。勿論、これは眞の英國艦隊の姿ではないから、決して「眞理」〔Wahrheit〕ではない。少くとも「眞理らしいもの」〔Wahrscheinlichkeit〕であるといひ得られる。しかしながら「眞理」は詩人バイロンのいふ通り、「深みを愛する眞珠」であつて、決して日常的に、目前へ現はれて來るものではない。そして「輿論が萬能力を帶び、そのヴェイルは地を被ふて闇となし、正邪の判斷をして偶然的のものであらしめる」。〔Childe Harold's Pilgrimage. Canto Ⅱ.—XCIII〕。日常われ等の目前に現はれてゐるものは、擧つて「眞理らしきもの」にあらざるはなく、これがわれ等現下の行動を現實に決定し、また歴史を實際に繰りひろげる根源衝動とはなるのである。

三　さて「眞理」が、眞實の「存在層」をつくり出すとすれば、「眞理らしいもの」は、「擬存在層」——A・マイノングのいふ〈Pseudo-Existenz〉を創出するであらう。さりながらマイノングの「擬存在」は、なほわが「表象」〔Vorstellung〕内に存し、「内容的に決定せられてゐる」のである〔Vgl. Untersuchungen zur Gegenstand theorie und Psychologie. Leipzig, 1904. S. 24., S. 36.〕。しかるに思想宣傳による虚僞の「ヒポテーゼ」により、そこに創出せられた「擬存在層」は極めて粗笨極まるものであつて、内容的にさへ、決定せられてはゐないのである。この粗笨極まる「擬存在層」は、しかしながら克明に物語られた「眞實」そのものよりも、或はまたその「眞實」の母胎であるところの眞の「存在層」そのものよりも、いやはるか能辯にして壓倒的の迫力を有ち、恰も惡魔の吐息の如く、ほの闇く眞の「存在層」を——しかり「眞理」を擁蔽し去つて、遂にこれをして深みを愛する眞珠であらしめる。否、それのみか、それを解消せしめて了ひ、こゝに意義の轉換を來さしめ、「擬存在」から「擬」の、「眞理らしきもの」から「らしき」の形容詞を抹削し、これを「存在層」に合流せしめ、爭ふべからざる「眞理」として肯定せしめられる。そしてそのトリックを暴いたものは、かへつて叛逆の名において彈呵せられるのである。

ユニークな「宣傳技術」によつて、現實とは正反對の「擬存在層」を創出し、戰勝國でありな

から戰敗國としての、戰敗國でありながら戰勝國としての「環境」を招來せしめるのである。けれども、かうした「環境」は暫定的のものにしか過ぎず、現實に照合せられて立ちどころに解消を來すこともあらう。それで狐の如き奸點を以て、我方に有利な「環境」を作り出されたと見るや間髪を入れず、電光石火の勢ひを以て狼の如く飛びかゝり、この好機を捕ふることを忘れてはならぬ。――かうした古色蒼然たるマキアベリズムの信條が、こゝに再び「思想宣傳戰」のそれとなつて再生したのは奇緣である。

四　奇緣といはゞ「思想宣傳戰」といふユダヤ的構想が、ユダヤ人の哲學者であるヘルマン・コーエンの「根源說」〔Ursprung〕と、思想的聯關を維持せること、これである。コーエンに從へば、あらゆる思惟の「基礎」は「根源」である。そして「思惟が根源に存在を發見した時、その存在は、思惟が創出したものゝ外の何物でもない」のである。〔Vgl. Logik der reinen Erkenntnis. 1922, S. 36〕。A・マイノングは、未だしも「存在」の上に「擬」の形容詞を附加したけれども、コーエンは、あらゆる「存在」を、「根源」〔純粹思惟〕の「創起する」〔erzeugen〕ところと斷定した。――これを實際に施して、考へ直して見るがよい。たゞ純粹思惟の所作によつて無から有を導き出したり、歷史を「創作」したりすることが出來得るのみならず、延いて敗戰の記錄を糊塗して、戰勝のそれに改竄することの可能性さへもが是認せられる結果とならう。

恐るべき時代が展開した〔！〕。思想宣傳戰は曲物をして聖者たらしめると共に、聖者の背より聖輪を剝ぎ取るの放れ業をさへ敢へてする。こゝで學者の役割は特に重大なるものを見る。――固定化した「ヒポテーゼ」〔信仰〕と、「歷史」〔史的定命論〕とに對して、無慈悲なる批判のメスを加へ、そこに包隱せられた「欺罔」を天日の下に暴露して假借せず、「擬存在層」を排除して「存在層」を顯現せしめ、日蔭に匿れたものを凝視することにのみ、學者の崇高な義務がありにして「眞實」を含むこと多き歷史を編纂せしめるべき資材と判斷とを貽すべきである。文化科學者たると自然科學者たるとを問はず、これを除いて現代に貢獻すべき學者の任務はいづくにあるか。――「思想宣傳戰」が文書により電波によつて、熾烈の度を加ふる現代において、特にその然るを見るのである。

いま前に述べたる「思想宣傳戰」の哲學を、箇條書にして示すと、下の如きものとなるであらう。

A　「虚僞」の措定より、或種の「環境」を創始すること。即ち、

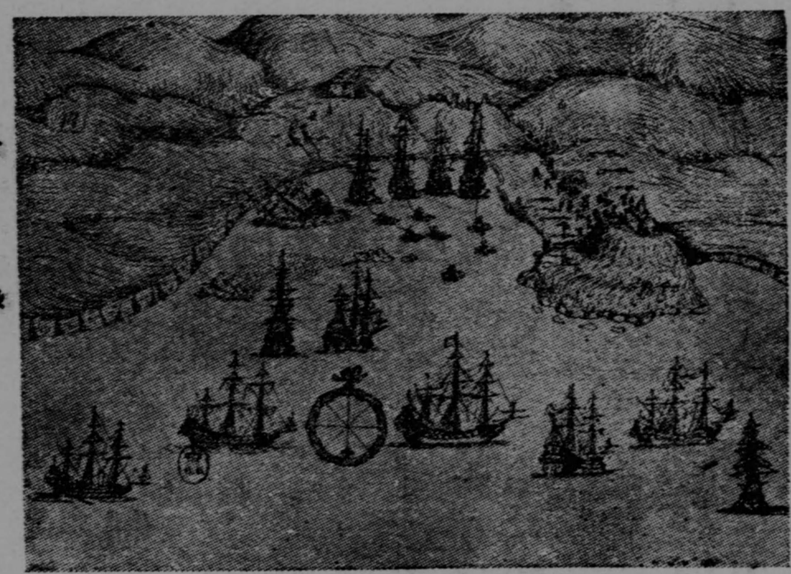
B　如何にも「眞理らしき對象」若しくは「擬存在層」を創起して、これを對手國或は第三國人民に、懷疑すべからざる「ヒポテーゼ」として「享け容れしめる」こと。

C　換言すれば純粹思惟の所作を以て、無から有を孕み出すこと。よしんば絶對的無でなくてもよい。宣傳裝置にしてよろしきを得れば、微量の有からでも、それに幾層倍する虚僞の有を孕み出す可能性がある。

D　以上のやうな思想工作を以て、對手國或は第三國人民の心機に轉形を招來せしめ、自國に有利とする環境が現出するや間髪を容れずして、これを十分に利用すること。

E　これを十分に利用することによつて、「意義の轉換」がこゝに成就せしめられ、虚僞は眞實となり、「擬存在層」は醇乎たる「存在層」となつて顯現する。

我國に「虚僞から出た眞實」といふ言葉がある。思想宣傳戰の目的は、全くこれを出でないのである。——一般に考察せられてゐるやうに、思想宣傳戰の本質は、たゞ「虚僞」を放送することと、それのみにあるのではない。それは未だアルファである。そのオメガは、この虚僞を基調として、少くとも自國に有利とする環境を創始することにあらねばならぬ。この新環境を全幅に利用することによつて、これを宿命化し、歴史化することが可能なのである。



〔附錄〕

制海權の問題

制空權の問題

落下傘降下部隊戰技の形而上學的基礎

制海權の問題

陸・水・空の三者は、現代における社會伸展の三單位である。即ち經濟生活において相互に勝れる、また劣れる何物もなく、ひとしく重要な運輸機能の三プリンシプルとして鼎盛せしめられてゐる。これはひとり經濟上の諸現象にとゞまるものではない。軍事上にも、將來の戰略を樹立する三局面として、頗る重要な意義が均等に認められてゐる。但しこれは科學の現狀に照破し、今日おける伸展段階を本位としての觀察である。

いまこれを歴史的に、この三者の理念およびイデオロギイが發達して來たプロセデュアを回顧するならば、それは陸—水—空の序列であらねばならない。最も初期の經濟生活は農業であり、軍事では步兵ないし騎兵であつた。幾分、立體的に彈道を見定めて、攻撃手段を講ずる砲兵の出現は、比較的、後世の事に屬するのである。それで農業と軍事とを結合する理念は、最も原始的な構思に由來するものであつて、これを今日に施すのは、確かに時代錯誤に陷れるものといはねばならない。〔この種の謬想は、今日未だなほ社會の一部に行はれてゐるやうである。——現代の軍事は、海運業および化學・機械工業と愼密な聯繫を維持すべきものであつて、農業とのそれは、勢ひ稀薄とならざる事を得ないのである〕。フランス語の〈Pionnier〉は步兵といふ意義であり、これが轉化してイギリス語の〈Pioneer〉即ち「開拓者」といふ言葉となつた。これも初期にありて、農業と軍事とが等式で繫がれてゐた事を、言語學上證示してゐるものであらう。

ところでこゝにおもしろい事實がある。即ち陸—水—空の理念が、特に軍事上の觀點よりして發展して來た序列を回顧すると、必ずしも直線コースに依つてはゐず、頗る錯綜したジグサグ線を素描してゐることである、いふまでもなく、陸地において設定せられる「陸上權」に起續して擡頭して來たものは「海上權」の理念であつた。例へばナポレオン戰爭の時、イギリスは既に優越であつた海軍力の庇護を以つて、兵をスペインに上陸せしめ、ナポレオンに一撃を加へたのである。イギリスはまた、ロシアと開戰した時も、確乎たる海上の制覇を利用して、兵を遠くクリ

ミヤに送り、聯合軍とゝもにロシアに對し、その恢復に三十年もかゝつた程の痛撃を與へたのである。イギリスは更に、その無敵であつた海軍力を以つて、香港を支那より割讓せしめ、またアレキサンドリアを攻撃して、エジプトを占領することが出來たのであつた。――これ等の成功に依つて、こゝに「陸地は何處までも、また何時までも海岸に服從する」といふ新しいイデオロギイが誕生し、正認せられるに至つたのである。

しかるに叙上「海上主權の現實的な利益」に對し、抗議を提出した人がある。それは歴史哲學者のギユグリエルモ・フエルレロであつた。フルレロの、やゝ横書破り的なる抗議を强化するものは「鐵道の發達」である。卽ち「鐵道の發達以來、陸上における軍隊輸送は、海上のそれに比して甚しく容易となり迅速となり、かくしてその地位を顚倒するの結果となつた。海上の覇權國は行動の輕捷にして敏活なる優越性を失つてしまつた。これは或る時機においては、決定的のものであり得たのである」と。

フエルレロは、鐵道工業の伸展に依つて、「陸上權」のイデオロギイが清算せられ、「海上權」のそれが正認せられること久しい後に、また「陸上權」への復歸を是認してゐるものゝやうである。これは、しかしながら逆轉を說いてゐるのではない。新しい「陸上權」の構思はすくなくとも十九世紀産業革命の直接結果であつて、大規模な生産課程と完備せる鐵道網〔自動車・トラック等々の陸上運輸機關も、亦、當然、この内に含まれるべきものである〕の作用を端的に攝受したものである。かうした最新裝備に依る「陸上權」が、傳統的「海上權」を克服した實例は、過ぐる歐洲大戦であつた。

いはゆる「陸上權」といふ袋はおなじである。内に盛られてゐるものが、しかしながら範疇的に變つてゐるのを見る。むかしは、プリミチーブな農具であつたものが、新しい袋には、敏感にして大仕掛な機械が準備せられてゐる。若し陸上の最新裝備〔鐵道網〕にして缺如することがあらば、忽ち「海上權」が最後の切札となつて、その壓力は、立ち所に陸上をして、海洋の從屬物たるの地位に蹴落すのである。フエルレロは、その實例として日清・日露の戦爭を擧示してゐる。

「……しかしながらなほ、日本をして一八九六年には支那に打勝たしめ、それより九年後にはロシアに打ち勝たしめたのは、海上制覇の故である。しかしこの二大帝國〔支那・ロシア〕の軍備はその對手國である日本のそれに比して、甚しく優れてゐたものであつた。しかるにそれの全力を

使用することが、不可能な狀態であつた。支那は、鐵道を所有しなかつたし、ロシアは單線〔捌け口の不十分な——〕をしか、有するに過ぎなかつた」と。

更に過ぐる世界大戰では、「海上の制覇」が、日清・日露戰爭において、日本が海上權を把握して勝利を獲得したやうな結果を得る事には甚しく遠ざかつてゐた、とフェルレロはいふてゐる。イギリスは前述ナポレオン戰爭の時、ウェリントン卿がスペインで成功した故事を反覆しようとして、ドイツか、ベルギイかの一地點に上陸することを考慮したが失敗に歸してゐる。それはドイツが完全に、鐵道を把握していたからであつた。一九一五年のガリポリ上陸は成功したけれども、鐵道に依つて輸送せられた軍隊が、コンスタンチノープル〔第二のセバストポールの運命にあつた！〕を救ふたので、折角の上陸も無駄になつてしまつた。支那の沿岸は、各國海軍力のヘゲモニイ下に置かれてゐた。それだのにも拘はらず、支那の擾亂を鎭定することが出來ないのである、とわが歷史哲學者は叙述してゐる。

ギュグリエルモ・フェルレロが、若しアンリ・ベルネイのいふ通り、世界の諸大國の、その海軍の爲めに支出してゐる莫大な經費は、その收め得る諸利益に對比して合理的でない、といふ結論を引き出す爲めに、以上の提論を試みたとすれば、それこそ飛んでもなき認識の不足を露出してゐるものといはねばならない。何處の國か陸上の——大陸奥地の諸問題を解決する爲めに、海軍を置くの迂愚を敢へてするものがあらうか。すくなくとも「海洋の制覇」が、その國に取つてヴアイタルな問題である時に、〔例へば日本の太平洋におけるが如き〕、その國は、特に大海軍の必要を痛感するのである。おなじ事が既往におけるイギリスに就いてもいひ得られるであらう。「戰時における海洋の自由は、忌憚なくいへば、これイギリスの破滅である」けれども、必ずしもドイツ・フランスの破滅ではないであらう。しかるにフランスは、在外いづれのものよりも特に「極東海軍力」〔——ベルトロウ中將が坐乘する巡洋艦「プリモウゲイ」、特に暖國に駐屯する目的で工夫せられた報知艦「デュモン・デュルヴィル」ほか小型五隻、太平洋諸島を巡邏する「サヴォルニヤン・ド・ボラツサ」、楊子江小艦隊として砲艦四隻、廣東におけるフランス租界の防備用として砲艦一隻およびインド支那に潛水艦を含む數隻、等々より組織せられてゐた〕を重要視するのは何故か。それは決して支那の擾亂を芟除しようが爲めではない。「殊に支那の場合においては、その中央權は外國人の生命財產を尊重するだけの權威を有せず、また常にその意

志を有してゐないのである。これ『極東海軍力』なるものが、われ等がヨーロッパ以外で保持する艦隊中、最も重要である所以である」とフランスの軍事評論家アンリ・ベルネイはいふてゐる。〔フランスの、いはゆる「極東海軍力」の手に依つて爲された新南群島と、練習艦「ジャンヌ・ダルク」が營んだクリツパアトン島との領有の如きは、むしろ副產物であり、ないしは景物である。――彼等の主要目的ではない〕。

劣弱な瀕海國民が、それでも自分の尊嚴と特權からして、强大國民の干涉意識と、一致しない意識および理論を持つに至つたのは事實である〔例へば舊國民政府下の支那〕。しかしながら劣弱國民の有つ文化水準、それの直接の示現である「擾亂」は、間々、强大國家が劣弱國家の沿岸に設定した特種權益を危殆ならしめる事がある。この際、海上威力を以つてこの危殆を可及的微量に食ひ止める事は、卽ち拔本塞源的に危殆の職由するところを解消するに充分役立つであらう。「海上權」は、こゝでフェルレロの考へたやうに、海岸を限界として消滅するものではない。海岸線を飛躍して「陸上權」の一機構と轉化する可能性さへもが、充分に許容せられてゐるのである。ア・トマジイが『海軍陸戰隊』なる著述を思ひ立つたのは、或はかうした歷史的事實を是認したものであつて、フェルレロの「海上權」論を覆す反證を布陳するものではないか。著者は自ら紹介して、本書では「過ぐる大戰中、陸軍における水兵の任務に就いて叙述した。そして世間に忘れられてゐる二、三の挿話、スフアツクスの奪取・セイムール縱線・カサブランカ上陸および一八七〇―七一年の戰爭中、陸上海軍の行動を主題としてその概要を取扱つた。この最後においてセダンおよびメツツの陷落後、水兵が國家の組織した唯一の兵力を形成してゐた」といひ、また「この陸上の兵力を形成してゐた」といひ、更に「この陸上部隊を指揮した將官ジョーレギベリイおよびパンホウニ提督や、ヴョーレイおよびブルユア兩大佐ないしグージョウ中佐等々の名前を記憶してゐる人達は殆んどない位である。すべてこれ等の士官は、陸上で水兵を率ひ、砲車隊を指揮して、攻擊の手本を示したのである。慘憺たる窮地にさし迫つても、有力な寄與をなして、名譽を保持することが出來た。パリにおいても、彼等〔水兵〕は、稱贊すべき勇敢性・質素性および規律性を以つて、この城塞を防禦するを忘れない。現代の水兵も、先輩の武勳を追憶し、心魂を皷舞して止まない事績を認識することに依つて、裨益するところがあらう」云々と述べてゐる。――ア・トマジイは論をすゝめて「海上の艦船は、小さな、ひとつの獨立世界である

から、自給自足を以つて生活してゆかねばならない。しかるに資源には限りがある。それで水兵は、この限られた資源を、かなり上手に利用することを學ぶ。由來、氣轉の利く事はフランス人の特質であつて、殊に海員において、この特質が極度に發揮せしめられてゐるのを見る。地上で敵と接觸すれば、何時でも豫期せざる場合に卽應して敵を苦しめる。また自己の短所を補ふことにおいても、人を驚かすほどの融通性を持ち合はしてゐる」と、やゝ自畫自讃にちかい記述をもつてゐる。フランス人であるわが筆者が、ラテン的情熱を以つて、陸上部隊としてのフランス水兵の功績を歷史的に誇筆するならば、われ等は當然、明治三十七年三月の頃、わが第二軍の遼東半島上陸を掩護すべく、佐世保において編成せられた海軍陸戰隊〔四個小隊より編成せられた一個大隊、總員一千餘名〕およびその後身にして旅順の攻擊に參加し、わが第三軍と協同動作を營んだ海軍陸戰重砲隊〔甲乙丙の三個隊に分つ。十二珊砲一門には砲車長以下四十五名、十二斤砲には同二十六名を配置す。海軍重砲隊としては、未だ曾て前例なき優勢なもの〕の、かゞやける武勳を併記するの特權を、こゝに嚴肅な態度を以つて、天下に主張しなければならない！　更に這般の上海事件や、今次の日支事變および大東亞戰爭に際し、火力・機械力、ともに陸軍にゆづらない裝備を施したわが海軍陸戰隊の活躍は、未だ世人の記憶に鮮なところであらう。挺出せる形而上的—形而下的「統制」を保つ海軍力は、ひとり海上におけるのみならず、陸上においても威力を擴充することの、何よりも雄辯な證左はこれである。

「陸上權」が「海上權」に、從屬せしめられる事のある實例は以上の如くである。卽ち軍艦から揚陸せられたる、ないしはアメリカの「海兵隊」のやうに初めから陸軍の營みを目的として編成せられたる海上部隊の手に依つて、「陸上權」の一部が「海上權」に歸入せられる事實のあるのは眞理である。しかしながらその逆の「海上權」が「陸上權」のヘゲモニイ下に立たしめられることは絕無といふてよい〔砲臺の威力を、過信してゐたわが封建末期の國防論者・攘夷論者の內には、間々この種の謬見に囚はれてゐる人もあつた〕。それで、よしんばジグザグ線を辿ることはあつたにせよ、制覇の對象が、陸より海へ推移した事は歷史的に絕對であるといはねばならない。殊に整備マキシマムに達した陸上運輸機關であればあるほど、中核に一擊が加へられたが最後、系統的に全體が、その機能を失墜せしめられる事も多大の確實性において豫期し得るのである。

「陸上權」を「海上權」へ歸入せしめるもの——卽ち「海上權」を海岸線に停止せしめず、それ

のヘゲモニイを大陸奥地にまで延伸せしめるもの――いひ換ふれば「陸上權」「海上權」の對立をさへ解消せしめ、こゝに單一なヘゲモニイを設定するものは何か。それは實に「空權」であらねばならない！　陸―海―空の伸展序列は遂に絶對的であることが、こゝに炎の文字を以つて證示せられるのである。更に現段階における價値判斷の上からいはゞ、この序列が顚倒して空―海―陸となり、機能判斷から律すれば海―「空」―陸の形式が正認せられ、「空權」を契機として、海上・陸上の諸權が、單一ヘゲモニイ下に歸入せしめられる事實が開示せられるのである。

制空權の獲得の爲めに、將來の戰略・國策を考察すること、イタリイの將軍ドウェほど極端なるものはない。堅い「計算論理」ならでは支持する事を欲しないドウェ將軍は、「過去は何等、將來の參考とはならない」と宣言してゐる。――但し「海上史」の研究は除外例である。なんとなれば「制空および制海の問題は共通點を與ふるが故である」。しかしながらその兩者の優秀は甚だ明らかである。「大戰中協商國側はバルト海、その他の水面で『制海權』を獲得した。しかるに根據地に逃竄してゐる敵海軍力までを、撃滅する事は出來なかつたのである。この制海權は、或は兵站および作戰行動の爲めに、海路を使用せしめたけれども、重々しい厄介が、依然としてそこに存在してゐた。それは屢々、敵の潜水艦・槍掠艦が出沒し、海岸および商船列に對して侵撃を加ふることである。それで、飛行機の出現前、海軍力は、浮動軍〔潜水艦・槍掠艦等の奇襲部隊〕の爲めに荒らされない根據地に隱れてゐて、戰鬪を避け得たことは眞實である。しかるに空軍は現に、すくなくとも理論的には、爆撃を以つて根據地を全部攻撃しつくすことが出來るのである。――この新事實は、次に來るべき制海權爭覇戰の步度を、甚しく變更する結果となるであらう」。水上の兵器は敵の打撃に對して國を防禦すべき使命を果すべく、段々、不適合の狀態となるに反比例し、飛行機は、ます〳〵攻撃的性能を鋭尖ならしめるのである。如何にも「飛行機からの爆撃は、大砲の射撃ほどの正確に達しない、たゞし例外の場合のほかは……。けれどもかかる正確さは、必ずしも必要でないのだ。小さい標的物は重要でなく、またこれを占有するほどの價値もない」。それで將來の戰爭にありて、「理論的に物質力・意志力の同等なる兩敵が、互に制空權を獲得しようが爲めに搜し合ふであらう」。しかもこの目的を達すべく、大航續力を有しかもそれが爲めに、攻撃性能の消耗せられることなき、大自律を有する飛行機が使用せられなければならない。大戰當時は、たゞ沿岸航空を營むに過ぎなかつた「驅逐機は、もはや防禦兵器

であるに過ぎない」のである。水上勢力の援助を必要とする「補助航空に至りては、所詮、無益の冗物であつて、しかも有害である」。明日の戰爭は、何處でも「時間」を第一主要の因子となし飛行機の「航續力」キロメータアを基礎とする。なんとなれば「空軍は甚しく可動性を有つ——そこにはたゞ數量の問題しかない」からである。ナポレオンの戰爭哲學は、專ら「空間」のみを重要視した。しかるにわがドウェティズムは「時間」を力說する〔「空軍は著しく攻擊に適當する。なんとなれば最後の瞬間まで、敵をして目標物を不安定ならしめ、防禦地點に援助を引寄せしめる時間を與へない！」〕。空軍は、かくして、「短時間」〔即ち速度〕といふ數量の理念より、價値ある結論——即ち空の制覇權に導くのである。「凡ての厄介を取拂つて、主人公として振舞ふことの可能性」とは、制空權に對して下した將軍の定義である。

フアシズム・イタリイの詩人的哲學者であるドウェ將軍が、「輿論・群集心理に支配される議會の輿論は、經驗的の論據に基く推理を解し得ないものである」となし、「大衆に對する論戰の卓越せる方式は、改革者を尊敬するものに寄與すところがあらう」といへるも怪しむには足りないのである。空軍〔豫備軍である民間航空も含めて〕の整備は、けだし高價なものにつく。それだけ議會制度に依る社會民主主義國よりも、大指導者の獨裁下において、プログラムより實現へのリズムが迅速を得るのは當然であらう。但し補助航空を無用有害のものとする將軍の斷案は、確かにド・レスケーユの指摘する通り、航空の可能および實力を見損つてゐるものである。水上驅逐機の如きも、現段階においては、依然として攻擊的武器と目せられてあらう。しかも陸—水—空の伸展序列を肯定し、空權制覇の爲めに明日を約束せるは、依然として「堅い計算論理」の連鎖に繫るものであつて、あながち≪licentia vatum≫〔詩的放縱〕の弊に陷れるものではないであらう。

〔附〕こゝで制海權の問題に關心を繫ぐ人の、看過してならないのは、曾てソヴェート聯邦の海軍評論家間に擡頭した新興學派の提說である。即ちA・P・アレクサンドロフといふ署名の下に發表せられた「制海權理論の批判的分析」〔Analyse Critique de Theorie La Maitrise de Mer〕と題する論文がそれである。即ちマルキシズム理論を海軍に適用し、「數の法則」に拘束せられることなく、その聯邦が必要とする艦種——例へば輕單位の水上艦船・潛水艦及び航空母、

艦等を以つて敵を圓形内に包圍し、熱烈性と執拗性と、同時に諸兵器の思慮深き使用による「結合攻撃」〔attaque combinée〕を敢行し、連續的な、そして執拗な攻撃一聯を以つて敵を殲滅に導かうとするものであつて、こゝに古めかしい「制海權」の理論を打破しようと足掻いたのである。さりながらソヴェート聯邦の五箇年計畫が進捗し、造船施設が整備に向ふと同時に、それに隨遂して、いはゆるマルキシズム海戰理論なるものは清算しかけられ、英米等の資本主義國並に、主力艦本位の海戰理論が再吟味せられると同時に、「制海權」理論は、ふたゝび蘇生し來つたやうな感があらしめられる。

「制海權」の問題に對するソヴェート聯邦の新興學派の提説につき、こゝに想起せしめられるのは、曾て佛國に起つた青年學派の提説である。アンリ・ベルネイは、「佛國海軍政策の五十年」を回顧し、この青年學派のことに言及してゐる。それに據るとこの青年學派のイズムは一八八六年―七年にわたるオーヴ大將の海相時代に凱歌を奏したものであつて、「費用少くして優秀な海軍力を得よう」とするにあつた。その結果、佛國海軍は戰艦を中止し、輕快な巡洋艦と水雷艇のみを發註することゝなつたのである。――しかも青年學派なるものゝ主張は、當時の「佛國下院が民衆と共に、海軍の重要性を全然認識してゐなかつた」ことの反映と見るべきであつて、こゝに佛國海軍が衰頽の道向を辿り、遂に海上權を喪失するに至る酵母を宿してゐたのである。

佛國の青年學派の主張は、前述、ソヴェート聯邦のマルキシズム海戰理論と同じ亞流であつて、畢竟、海軍を認識しない素人の間に、俗受けのする謬説であつた。――かゝる謬説が正認せられたが最後、その國の海軍力は忽ち衰頽の一路を辿り、制海權は喪失せしめられるに至るであらう。ともに海軍國國民たるものゝ、斷乎として排擊せねばならない危險な毒素を含有するものであつた。

制空權の問題

Es ist noch ein ritterlicher Kampf dort oben in den Wolken,
an der Sonne.

— Göring —

I

いま世界文化史の發達を檢するに、つねに相反する二樣の志向を歩んでゐることが分明しよう。それの形而上的側面は、戰爭を未然に解消せしめようとして、いろんな協約・法規を制作する。またそれの形而下的側面は、戰爭をいやが上にも深刻化し、攻擊・防禦の諸技術を效果的であらしめようが爲めに、かず〳〵の新兵器を考案する。ともに高度に達した「人間叡智」の所產であると思惟し得られる。最新兵器を考案し、運用する技術を知らない民族が、また戰爭を解消する努力も拂つてゐないのは、こゝで論理的必然性であることが分明しよう〔例へば事變前の支那〕。それが故に最新兵器は高度文化の秤量であるとゝもに、また平和の安全保證であるとさへ考察せられるであらう。如何にも國軍を最新兵器に依つて裝備しつくすことは高價なものにつくであらう。それは、然しながら近き將來において、或は殺到するかも知れない危機に對する保險料なのである。

元モスコウ大學のイルジン教授は、ソヴイエート露西亞の戰爭理論を具陳して、共產主義者はブルジョア國家における「あらゆる內亂や、ブルジョア國家に對して、プロレタリアの挑戰しかけた戰爭を是認してゐる。その上ブルジョア國間に戰爭勃發の惧があらば、プロレタリアは勸誘して、極力、これを內亂に導かしめる」[1]のであると、露骨にも開示してゐるのに鑑みるがよい。しかも戰爭をしかけられた國內に、捲き起された「內亂」は——卽ち〈Cataclysme〉は、すくなくとも飛行機を道具とする戰爭技術に依つて、ます〳〵それの悲劇性を深刻化する。こゝに「內亂」「革命的混亂」を自國內に惹起せしめず、轉じて對手國內に勃發せしめる最後の切札は、實に平時における工業生產力の遺憾なき充實・整備において準備せられてゐる。こゝにおいて飛行機は、その國の工業生產力が生產した至高の綜合的見本であるといはれよう。

1) イルジン教授著『地獄の世界』〔ドイツ文〕。――「赤軍」と題して、陸軍輜重兵大尉駒木嘉太郎氏邦譯。『航空事情』第一〇九號、三頁參照。

最新兵器の尤物は飛行機である。飛行機を道具として、これからの戰爭型態は――否、戰爭型態を孕み出す戰爭のイデオロギイは、革命的な轉形課程に推進するであらう。いはゆる宣戰を布告せざる前の戰爭行爲の如き、全く航空を措定した曉においてのみ、雄辯に物語り得られるのである。軍用飛行機には、偵察・戰鬪〔驅逐〕および爆擊〔攻擊〕の三機能・三種別が認められてゐる。偵察機は敵を索め、それの監視を目的とし、戰鬪機は專ら防禦の任に當り、爆擊機は敵の陣地・本國の空中に進出し、敵の地上・海上の諸勢力を爆破し去ることを目的とする。けれどもいま嚴密に論ずると、かく專門的の一機能をしか發揮し得ない飛行機は、未だ最新兵器とはいはれず、既に舊式の部類に屬するものである。今次の歐洲動亂直前、各國において、續々、製作の道程にあつた優秀諸機型は、この三役を一機に綜合した、いはゆる「三役兼機」〔three-in-one〕若しくは「萬能機」と呼ばれるものである。この「萬能機」の主要とする目的は、偵察・防禦よりも、直ちに敵本國の上空に殺到し、二千キログラム以上の爆彈・魚雷を投下し、敵の文化的・政治的および經濟的諸裝置を總括的、且つ無慈悲に掘りかへし、彼の戰鬪意志を、微開するに先立ちて挫折せしめるにある。かうした尖新な戰爭型態は、もはや舊式の「動員」に依つて行はれはしない。ハーバート・ラツセルの使用した「跳員」といふ言葉こそ、それを表現するにふさはしいものであらう。「跳員」をプロローグとして、そこに展開せしめられる戰爭型態は、從來のそれに見るやうな、長期的なものでは決してあり得ない。ほんの瞬間に決定的勝敗に導くいはゆる「青天霹靂的」戰術でそれはあらう。して見ると、飛行機が現出する戰爭型態は、從來の「平面」戰とは、全然、その範疇と質容とを異にする「立體」戰である。こゝで一概に最新兵器と呼ばれても、その意味は頗るデリケートなものであることを看過してはならない。

日露戰爭當時の主力艦の主砲十二吋・速力十八ノットであつたものが、その後の主力艦のそれは、十六吋・二十三ノットまでに增大した。しかも最新兵器の本質は、この四吋・五ノットの增大といふ數學的の說明に依つてのみ、理解し盡されるものではないのである。敏感なる讀者は、この數學的增大は直ちに辯證法的作用を端的に攝受して幾何級數的增大となつて伸展し、質的轉

換を現示するに至つた事實を認識し得るであらう。ア・トマジイが近代主力艦に就いていふてゐる通り、「噸數增加に關し、最も有勢な因子たるものは、液體燃料の使用に依つて容易になつた速度の、空前の發達である」。――即ち獨逸のポケット戰艦「ドイツチェランド」級の如きこれである。即ち電氣熔接と、快速モータア型とを採用して重量を減じ、それを武裝と速度とに充當する技術的大膽性を以て、「大洋貿易をして全く影を沒せしめ、バルト海の覇權を確把する」[1]ことを目的としてゐたのである。それに近代補助艦において、特に顯著な一現象であると目すべきは、艦載飛行機の發達であらう。〔その機能を重要視して、曾て「航空巡洋艦」といふ新型艦種の生れたことは人の知るところ――〕。

艦載飛行機の目的は、偵察と潛水艦とに對する防禦にある點でV・バルジョウのいふ如く「戰鬪艦の檣樓の動的延長であるに過ぎぬ」[2]事が證示せられてゐるのである。しかも艦載飛行機として「急降下爆擊」＞Diving-Bomber＜を使用することにおいて、それは偵察・防禦の消極的範疇より、一步進んで攻擊的意義を有つ積極的範疇に轉形してゐる事實を知る。――由來「急降下爆擊機」を機抒とするアメリカの攻擊的イデオロギイは、「急降下發射」を考案したフランス思想に職由するものであつて、V・バルジョウはこれを戰鬪機と爆擊機との間に想定せられた一種の結合である、と解釋してゐる。わが筆者は更に、大砲裝備艦と飛行機搭載艦との第一結合を許容し、それの實例としてスウイデン巡洋艦「ゴットランド」および「ノーザムプトン」型のアメリカ巡洋艦とを擧示してゐる〔即ち前述の「航空巡洋艦」〕。そしてこの「ノーザムプトン」型一〇、〇〇〇噸の巡洋艦は、水上機の最大限定を搭載することが豫期せられてゐる。アメリカ海軍は、特に遠洋海軍である。實際、艦載飛行機數は、これ等諸艦の航續力に比例してゐるかのやうに觀察せられてゐる。それは夥しい機數である[3]〔八臺〕といへるは、果して何人に對する警告として聽くべきか！

1) 參照「海軍ヰートジイ論」Le Yacht. No. 2582. 17/Sept. 1932. Cf. ＞La troisième Deutschland＜ Op. cit. No. 2584. 1/Oct. 1932.

2) Cf. ＞Les Origines et les Tendanes de L' Aviation Embarquée＜ L'A Revue Maritime. No. 164. Aoit. 1933

3) Loc. cit.

飛行機を第一義とする、最新兵器の能率における數學上の增大は、直ちに質容上の轉換を惹起することは、上に述べた通りである。最新兵器とは、從來の地上戰・海上戰の尺度を以つてしては到底、夢想にだも及び難い「跳員に依る青天霹靂的戰術」を展開すべき技術・機械の全體といふ種族名である。平面より立體へ、長期より瞬間へと轉形し、こゝに、戰爭型態における質容上の範疇的革命が看取せられてゐる。――飛行機はそれの第一義的道具であり、機械の「エリット」である。「飛翔する砲壘」であるとゝもに、また「飛翔する大砲」である。勿論、最新兵器といふ種族名の內には、毒瓦斯・高射砲その他の諸兵器が、放縱に含有せしめられてゐよう。その多くは、しかしながら飛行機の展開する「跳員に依る青天霹靂的戰術」を擴充し、またそれを防禦する補助機能にしか過ぎないのである。

われ等はこゝで、ドイツの海軍大佐オスワルト・ボールが『海事評論』〈Marine Rund〉で發表した有名な論文「航空機の海軍作戰・戰術に及ぼす影響を論ず」を檢討すべき必要に迫られてゐる。彼は先づ「航空機が艦隊との連絡なくして海軍の核心卽ち大戰鬪艦を擊滅し、海上の覇者たる地位を獲得することが出來る程度まで、それの攻擊・破壞力を增大せしめることが可能であり得るか」の疑問を提出してゐる。この疑問を殘りなく解決しようが爲に、ここに讀者は「制空」といふ事實に對し、周匝な理解を有しなければならない。筆者は「制空」現象に就いて、下のやうな定義を下してゐる。――卽ちそれは「制海と反對に、制空には目的そのものを、その內に含有してゐないのである。制空權の獲得は、畢竟、海上運動の自由を獨占する爲めの努力のほかのなにものでもあり得ないのである」と。――それだからして、「一度、獲得した空中の優越は、海軍の策動に依つて、これを運用しなければならない」のは、當然の結果と見るべきであらう。

それで「制空は、戰爭に至る決定を導き出し、又は確めさせるには、重大なる寄與をなすであらう。將來は敵味方の兩艦隊が、互に相交戰することがなく、またその傍を通過することさへも、最早見られることがないであらう。航空の勢力は、若し一旦、國民の運命の爲めに必要であると認めたら、海上の決斷によつて宣戰を行ひ、空中武器を俟つて、戰爭を短縮する方法となるであらうことを考察せしめるものである」[4] といふ總括的解釋が成り立つのである。ボール大佐に從はゞ、空軍勢力は戰爭行爲を開始せしめ、また終熄せしめる扉であり、またそれを伸縮せしめ

る安全瓣の役割を勤めるものにしか過ぎず、絶えて戰爭行爲そのものゝ第一義的本質を形づくるものではない。モーリス・ゼルニイの如きも亦、この空軍第二義主義の左袒者であつて「海上の制覇は、先づ水上海軍力に依つて、確把しなければならない。海軍力は戰艦・巡洋戰艦・巡洋艦・水雷艇および潜水艦と正確に分類せられてゐる。航空は、これ等海軍力の補助たるに過ぎない。これは科學の現狀において明白である」といふてゐる。

科學の現狀は、しかしながら何時までも、いはゆる「現狀」のまゝではあり得ないのである。即ち「金屬科學が進歩して、ＤＯＸ型のやうな多發動式水上機に、偉大な航續力を附與するディーゼル・モータアの實現を許すであらう曉には、水上艦隊は反對に航空艦隊の補助たるに過ぎなくなるであらう」といひ得られる。ゼルニイも今日の段階では、制海權換言すれば海上交通權は、潜航の覇權を有するものに歸屬することを認めてゐるのである。いづれにしても「水上艦は、漸次、地味な方式にむかつて進行し、航空は增々、有力な方式に向つて伸展するであらう。何となれば制空權に依り、陸軍および海軍ともに、それの戰略・戰術が顚覆せられるに至るであらう故に。さながら蒸汽機關の發明に依つて、從前の海軍戰術が轉形を餘儀なくせしめられうに……」と。海上交通權〔制海權〕の安全を確保するものは航路の管理と哨戒とである。これを脅威するものは、潜水艦と戰鬪水上飛行機とである。――潜水艦は完全に見ることの出來ない戰鬪武器であり、深海の制覇權を獨占し、危險圏内における訝しき音響の卓越した聽取者となる。しかも戰鬪水上機と愼密な聯繫を維持するに依つて、全戰術上、水上艦隊よりも一層おそるべき輕快な艦隊となるであらう。

ゼルニイは、かうした潜水艦＋飛行機の防禦性能は、攻擊性能〔戰鬪可能性〕よりも、甚大な效率を發揮することを肯定してゐる。これは、しかしながら「定石的」の提論であらう。すくなくとも攻擊性能一〇〇パーセントを發揮しようとするアメリカの「急降下爆擊機」のやうな、いはゆる「新參者」の出現に依つて、忽ち「制海は、制空を確保するに非ざれば、存在しないであらう」[5]といふ新理論が、こゝに遺憾なく正認せられるであらう結果となる。

4) Cf. ＞L'Influence de l'Aeronautique sur Opèrations et Tactique Navales.＜ La Revue Maritime, No. 443, Nov. 1931.

5) Cf. ＞Marine et Aviation.＜ Le Yacht, No, 2600, 21/Jan. 1933.

いま戰爭の理論を考察するに當つて、叙上「定石的」の提論ほど危險なるものはない。事、いやしくも航空問題に拘はる限り、ます〳〵「定石的ならざるもの」の志向を、鋭尖ならしめてゐるのである。航空技術が、より一層の「大膽性」を以つて、諸性能の驚異的伸展を營んでゐる一方操縱技術〔および射擊技術〕においても、大戰當時におけるリヒトホーフェン〔ドイツ〕や、ギヌメール〔フランス〕のやうに、むしろ天才的な「戰鬪的飛行家」〔〈Kampfflieger〉〕の出現も期待し得られるであらう〔殊に後者に關しては、參照、Jルーシュ「ギヌメール追憶錄」。〈Souvenirs sur Guynemer〉〈La Revue Maritime. No. 159. Mars. 1933——筆者は隊長プロカールの言葉として、「ギヌメールは他人の呼吸する如く、本能的に空中で戰つた」といふてゐる〕。

しかも優秀なる飛行機・發動機も、挺出した操縱・戰鬪技能も、ひとしく人間「叡智」の產物であり、高度の伸展を遂げた技術以上の何物でもない。ドイツの理想主義者はその根源衝動としてドイツに獨特な「騎士精神」〔〈Ritterlichkeit〉〕を擬し、〈はゆる〉〈Zeppelinmannfchaft〉〔ツエッペリン氣質〕において、それの現代的快露を證示してゐるけれども、それは月並な文學者的「天才」に纏綿し勝ちの、觀念的措定を必要とするものでは決してないのである。マクス・ぐエラアは「天才」を解釋して、〈Genie tritt nicht *erbgesetzlich* sondern „*meteorartig*" ins Dasein und seltsam unabhängig von den Kumlationen der „Talente", deren Vererbung den Mendelschen Gesetzen zu folgen scheint.〈といふてゐる。——あまりに「遺傳的」である爲め、因果の連鎖は包隱せられてはゐるであらう。天才能力の根柢には、しかしながら燦爛として、「テヒニーク」と「タレント」との蒐積が法則的の支配を確實ならしめてゐる。社會現象すべては、過現を通じて合法性の聯環を失ふことはない。但しそれが現示せられるに當り、時として「流星的」〔meteorartig〕の方法を執ることもあらう。航空現象において、特にしかりである。

⑥ Die Wissensformen und die Geselschaft. 1926. s. 30.

Ⅱ

いかにもそれは、破天荒のことのやうに、見へるかも知れない。吟味すれば、しかしながら聯

聯、統を次ぐ合法性の顯現であつて、遂に「ミートス」たるの價値が、消弭せしめられることも尠くない。前項に空軍が、水上勢力の補助機能である地位より超脱し、獨立性を獲得するに至る歴史を説明するものとして、〈DO－X〉號のことを引證した〔ポール大佐の論稿で――〕。しかるに本飛行艇の設計・製作者であるC・ドルニエは、小型飛行機がすでに改良の餘地がないのにも拘はらず、この種大型飛行艇の收獲を、なほ著しく增進し得ることを技術上の觀點から約束し、若し彼が「新〈DO－X〉號を、再び製作するほどの資力があつたならば、その大速力・航續力の一層に高められたものを現出せしめることが出來たであらう[1]」と宣言してゐた。

この由々しき宣言は、水上飛行機に附隨する傳統的信念を無慈悲に清算し、いはゆる「飛ぶ船」〔Navire Volant〕を目標とし、あらゆる飛行機〔艇〕の設計・製作を、轉向せしめるに役立つものである。C・ドルニエはまた、自ら〈L' Aéronauique〉誌に發表した有益な論文において、「飛ぶ船」に關する次のやうな理解と期待とを開示してゐたのを聽け。即ち「飛ぶ船」は水上に浮び、或は海洋の上空で、有效積載量の大量運搬に役立つ飛行機のことである、と理解する。これは中央部に船舶類似の型態を備へ、おほくの甲板を有してゐる。――〔かうした構成を持つ〕飛ぶ船は、普通の飛行機と對比して、その大きさには關係なく、その所業に於ては異つてゐる。先づこの船は……海上船の所業に、出來る限り接近してゐると[2]。わたくしの引用は、これだけで澤山である。何となれば「飛ぶ船」が、海上船の所業に歩み寄ることは、即ち軍事上、航空が水上勢力の補助機能である第二義的地位より蟬脱せしめられ、それに獨自なレイゾン・デートルが許容せられるに至つたことを、さながらに證示するものであらうから。

換言すれば航空がポール大佐やモーリス・ゼルニイの考へる如く、海軍〔海上單位〕の從屬物であるか、否かはそれが沿岸起地・離着甲板の必要を端的に痛感しない程度の大航續力を有するか、否かの問題に牽聯するといひ得られよう。約言すればV・バルジョウの航空自律性の課題において、空軍の今日を決定する至高のプリンチープが明らかに見定められてゐた。

制空は航空自律性の問題と愼密な關聯に立つ。以下はその回顧的叙述である。

1) 「ドルニエの宣言」〈Consideration sur le Dornier Do－X〉〈L,Aerophile, No. VIII, Août, 1932.
2) Cf. 〈Du Navire Volant. Experiences, deductions et perspectives.〉〈Par Claude Dornier. L'Aéronautique, No. 162, Nov. 1931.

航空の自律性〔Autonomie〕は、「時間に見積つた航空機の航續力である」とV・バルジョウは定義を下してゐる。これに對し、現代式水上艦が發揮する戰鬪の自律性は、最高速度を以つて示現した航續力である〔例へば舊ドイツS一一號型驅逐艦は、三〇ノットを以つて二時間の航續力を有す。――故に本艦の戰鬪自律性は二四時間であるといはれる〕。いま遠さ四〇〇浬に達する海上區域を想定せよ。速力三三ノットを有する軍艦は、二四時間を以つて、この距離を往復するであらう〔八〇〇浬〕。これと協同動作を營む海軍航空機は、すくなくともこの軍艦の有する戰鬪自律性とおなじ二四時間の航空自律性を發揮しなければならない。それが不可能である場合、それを補ふものは、航空機の「高速度」である〔卽ち三三ノットに對する一〇〇ノット〕。海軍航上機はそれの「高速度」を以つて航空自律性の不足を補ふのみならず、戰略的に重要な一因子であらしめるであらう。それと、卓越せる「上昇力」と相俟つて、比較的、高度の航空自律性を必要となしない沿岸航空において、いはゆる「流星的」〔meteorartig〕の方法が物語られてゐる。その飛翔に從事した時間は短い。しかも短い時間內において、壯烈な、流星的な、しかり頻る「天才的」な戰術が講じ得られるのである。

しかもこれは、「沿岸航空」の範疇において取扱はれるものであることを看遁してはならぬ。それが「沿岸航空」である限り、依然として空軍は、水上における戰鬪單位〔海軍〕の、從屬物にしか過ぎないであらう。われ等が關心事とする新しい戰爭哲學の當面の課題に擬せられてゐるものは、實に外洋において持續せられる水上機〔飛行艇〕の航空自律性であらねばならない。先達、アメリカのジョンソン海軍少將は、曩にアメリカ海軍の所屬水上飛行機が、サンディゴ―パナマ間三千浬の編隊飛行に成功したので〔一着陸〕、引き續き航續距離三千浬の可能性を誇る海軍飛行艇隊を建造し、組織するのプログラムを發表した。これに依つて見てもわれ等にとり、「如何にして今後、海軍使命は水上艦よりも、むしろ自律航空機――殊に水上機〔飛行艇〕に信倚することが可能であり得るか〔!?〕」の課題は、すくなくとも「如何にして先驗的綜合判斷が可能なりや」といふカントのそれ以上に、重大にして且つ切迫的の壓力をさへ以つて、眞劍に考察することが强行せられてゐたのである。

とはいふものゝ、外洋における航空自律性の問題は、大策源地〔例へば太平洋〕においては未解決のまゝに放置せられてゐる。「狹い海の場合でなければこれを考へることは當を得てゐな

い。それの場合として最も代表的のものは、ヨーロッパの海面である」。狹い海面にありては沿岸防備航空〔監視および驅逐〕・海上遊弋に從事し、或は某基地における敵に、直接攻撃を加へる爲めの空軍力〔爆撃海上航空〕ないし敵の沿岸に存在するめぼしい各地點を、直接に空中から攻撃する事の出來る航空力〔陸上爆撃機〕――これ等を綜合する「沿岸航空」の支配圏に屬し、いはゆる外洋の航空自律性は、これと重複若しくは混淆して考察せられてゐる。しかるに廣汎な大策戰地域においては、全然別箇の問題として取扱はれてあらねばならない。しかるに大洋上における「空中戰鬪の研究は、技術の現狀において、大航續力と空中戰鬪能力との間に、食違ひの介在することをまぬがれ得ない」のである。これは攻撃の氣體力學的性能に關する問題が、闡明しつくされた曉に、初めて殘りなき解決を見るものであつて、それまでは過渡的現象として、「カタパルトを有する沿岸艦」なぞが考案せられてあつたのである。

實際、偉大な航空自律性を誇つてゐても、それが爲めに、空中戰鬪力を消耗する結果を招致すれば、畢竟、何もならないことは常識的に知悉せられてあらう。例へば「ドルニエ・シュパアワール」水上機は、一五噸の最大荷量を以つて、一七時間の航空自律性を有してゐたけれどもこの數字は、未だ甚だ「學理的にして、最大限」のものと思惟せられてゐた。何となれば、それは軍事上、無價値な重量と經濟的速度を以つて、發揮せしめられたものであるからだ。

V・バルジョウ大尉は、海軍飛行艇の現實の自律性のレコードは、殆んど三〇時間を超えてゐるといふてゐた。――これも、しかしながらレコードだけであつて、實際問題としては、海上航空は晝間に非ざれば、實行が困難であることや、根據地と絶えず、愼密な連絡を維持する必要から、常に根據地と往復せねばならず、從つて策戰地帶の廣袤に依つて、自律性の程度に著しき限界が加へられること等を考慮に容れなければならない。それ故に航空自律性の問題も、武裝の如何に依りて變化をまぬがれないからして、極めて低劣な數字の上に測定せねばならない實狀においてあつた。

1) 參照〈Forces Navales Aeriennes〉――La Reveue Maritime. No. 150. Avril, 1933.〔「アウトノム」は、また「自律」以外に適譯はなさそうである。本篇では特に航空自律性とか戰鬪自律性とかの哲學者的表現を使用したことを諒とせられよ。……〕

して見ると、高度の航空自律性に依倚することに依つて、樹立せられた海洋制覇の理念は、すくなくとも現段階にありて、ひとつのユートピアにしか過ぎないのであらうか。〔例へばアメリカ海軍がプリンシプルとする太平洋を跨いでの遠洋・航空戦略！〕。假に一歩をゆづつて航空自治律の理想を、ユートピアであるとしよう、それがユートピアであればこそ、起續する時代のトーピア〔ユートピアに非るもの〕を孕む酵母が、そこに蒸化してゐることを誰か看落したであらう〔〈So führt der Weg der Geschichte von einer Topie über Utopie zur nächsten Topie. u f.〉とはアナルヒストであつたG・ランダウェルの言葉。——カアル・マンハイム所引〕[4]。歴史が經驗する時代々々の生活機構を通じて、下のやうな諸事實が、特に自ら明瞭ならしめられてゐるではないか。即ち「時代々々の生活は、その當時の意識におけるユートピイ核心と愼密な聯關を以つて、營爲せられてゐる。それ故に、時代々々の生活は、ユートピイ要素の、その當時の型態より發祥せしめられた直接放射である」[5]と。航空大自律性を誇る水上飛行機〔飛行艇〕を驅使して、大洋制空權を把握するといふ理念は、今日においてはユートピアである。それは、しかしながら明日のトーピア〔ユートピアに非るもの——即ち「オルドヌング」〕ではないと誰か大膽にいひ切られ得ようか。

V・バルジョウ大尉は曩に發表した古い論文[4]において、領土上における空中戦は、戦鬪機が、地上の固定的基地より出發するものであるから、殆んど獨立の方法を以つて遂行し得られる。海上にありては、空中戦は海軍行動と——詳言すれば制海權に關する行動と、直接の關係を持續してゐること〔第一結論〕、海上の制空權は、陸岸を離れて以來、水面の艦船——即ち海面の制海權と連絡して存在すること〔第二結論〕および外洋における自律航空は、海軍に特別の任務を附與するものゝやうである。それで敵の空軍に對する正當防禦の爲めには、この航空は艦載驅逐機に從屬する。結局、水上の艦船に倚賴するものであること〔第三結論〕等を主張してゐる。即ち航空自律性〔少なくともこれからの戦鬪に必要と必惟せられてゐる範圍における——〕と、攻撃的性能との間に目堵せられる二律背反を夙に開示してゐるものであつて、翌々年の一九三三年に執筆した論文においても依然としてこの矛盾は繰越され、「現代海軍力における背馳せる諸傾向はこれを完成しなければならない」といふ規範意識を以つて取扱ひ、現實の罅隙に際會しては上記の第三結論をそのまゝに反覆し、艦載航空を以つて、この背反を可及的高度に調節する「蝶番」の

役割を果すものであることを是認してゐる。

2) Ideologie und Utopie 1930. S. 176
3) Ibid. S. 188.
4) Lient. de Vaiss Barjot. 〈Reflexons sur la guerre aéro-navale〉 La Revue Maritime. Avril, 1931.

自律航空性の理念に包隱せられてゐる前述の二律背反は、しかしながら想像よりも速に全けき償還を見るに至るであらうことは、多大の「確らしさ」を以つて、こゝに豫想することが可能であらう。現に最近の「シュナイダア優勝杯獲得飛行競技」において、氣體力學と流體力學とが、今日まで信ぜられてゐた程、兩立しないものではなかつた事實を、さながらに證示したが如きも問題の解決に示唆するところ尠くないであらう。問題の解決は完全な「飛ぶ船」の出現にむかつて筋を引く。V・バルジョウが別の論文[5]で課題とした「水上驅逐機」〔〈Hydravion destroyer〉の如きは、それの一歩、手前に佇むものである。この機型は、水上機を撃破する水上機であつて、水面海軍力の支持なく、單獨にこの目的に當り得るものである。それ故に水上驅逐機は、海の飛行機であらねばならない。海のもの、なぜならば航空母艦の使用が、常に可能であり得ない海上において、作動するからである。海のもの、またなぜならば海を翔けてゐる間に戰鬪を採し、よしんば着水を餘儀なくせられることがあつても、戰鬪より受けた損害は輕微にして機體および人の損害を、惹起せしめるには至らないからである、といはれるのである。

こゝに、しかしながらひとつの拘束と、ひとつの條件がある。即ち拘束としては、水上驅逐機が效率を發揮するのは、專ら狹隘な海面に跼蹐せられてゐる事である。「過ぐる大戰中、アドリアチック海および北海の南部の如きは、水上驅逐機の策源地となつた」。「かゝる狹苦しい地帶では、海戰は頗る獨特の傾向を執るであらう。先づ小型輕快艇隊・高速力の小艦隊〔水面〕・潛水艦隊および水上機隊等々、すべて猛烈な攻擊力を發揮するものが、效果ある役割を果すことが出來るのである。これ等の内水上驅逐機は疑もなく、自律性の薄弱な武器を代表するものであらう。しかしそれに、臨機應變の支持を與へるものは水面勢力である。陸上驅逐機に海岸防空〔海軍基地〕の機能を附與すれば、海軍地帶の前衛として働き、かくして眞の海軍單位となるであらう。

何故ならば海軍單位は、上空の覇者たることに依つて、海の覇權を掌握したからである」。

以上は、しかしながら歴史的事實を物語つてゐるものであつて、もはや水上勢力の助力を必要としない明日の水上驅逐機の全部を豫測するものではない。それの航空自律性を高め、局面を狹い海面より廣い海面へ轉換すべく、速度・航續力のほかに尙重要な條件がある。――それは輕快なることである。しかるに「それの實質的條件は科學の現狀において、甚しく航續力を制限する」こと、航續力が、攻擊性能を減殺する如きものであらう。海軍飛行機において作用せられる輕快性・航續力および攻擊性能より組成せられる矛盾三因子は、商業・旅客用飛行機において問題とせられてゐる搭載量・速度および安全性の破壞三因子と、的確に應受するものである。それの一方に就いていはれてあらう氣體力學的―航空動力學的解決の試案は、他方においても、また均等に物語られてあらねばならない。その相互償還は、ともに一律であつて、背反せるものは揚棄せられ、不安全を通じて「均衡」を戰ひ取り、辯證法的の作用を極度的に働かせ、こゝに航空自律性を、それ〴〵科學的伸展の段階において示現するのである。

航空自律性〔商業・旅客飛行機においては、よりよき「飛行特性」〉Flugeigenschaft〈〕は、飛行機證に現示せられた「同時的ならびに起續的に、經驗せられた辯證法の最高形式」[6]であるといはれ得るであらう〔A・タールハイマア〕。

5) 〉Le Hydravion-Destroyer〈 La Revue Maritime, No. 443. Nov. 1931.

6) Einführung in den dialektischen Materialismus. 1928. S. 67.

讀者は、いまゝでの叙述を通じて、海軍航空に「沿岸航空」と、外洋、廣大な局面において設定せられる自律航空性との二大區別の存する事實を了知したに相異がない。しかしながら無條件の水上勢力の支撐より完全に蟬脫することの出來た航空自律性は、現段階においては、未だユートピアにしか値せず、その豫備階梯として「艦載航空」〔l'avion embarquée〕が、目下のところ、かなり重要な役割を勤めてゐることをも併せて認識することが出來たであらう。「艦載航空」は如何にも近き將來において、最も高度の航空自律性が獲得せられるまでの〉propä-deutik〈を超えた何等の意義も具陳することがないかも知れない。これは、しかしながら辯證法的伸展の

全體的觀察に基づくものであつて、すくなくとも現段階を本位としての相對的觀察を以つて律すれば、依然としてそれは「絶對的」の何物かを抑揚たかく、われ等にむかつて呼びかけるのである。殊に遠洋・航空作戰をイデオロギイとするアメリカの航空母艦・巡洋艦各級が搭載する艦載飛行機數およびカタパルト臺數は、われ等に取り、無關心のものとして看過することは金輪際、出來ないのである。たとへ僅少なりとも、迫力を以つてわれ等の安全感を刺戟し、大東亞の平和に脅威を加ふる限り、所詮、絶對性を有つ「客觀的範疇」であらざることを得ないであらう。それに策戰地帶としては、廣大なること他に匹儔なき太平洋ではあるけれども、そこにわが委任統治領を中心に無數の群島が散在し、航空基地は至るところに見出され、大戰當時におけるフランドル海岸[7]にも肖似して、危險なる「袋路途」〔Sackgasse〕が、限りなく存在してゐるのである。よしんば高度の航空自律性に惠まれずとも、太平洋は地形上、敵味方の攻擊的驅逐水上機が旋飛し放題の好舞臺であるとさへ、思惟し得られるであらう。しかもかうした狹隘な策戰地帶で、攻擊的驅逐水上機と結合せられ、その威力を恣にするものは、水雷であらねばならない。實際「爆彈では攻擊せられるが、水雷では駄目であるといふやうな標的物は、その數が少いのである。パナマ運河の閘門やガタンの突堤に對してすら、水雷攻擊は工夫し得られるのである」。こゝで生れたものは雷擊機〔l'avion-torpilleur〕であつて、それの機能を極度的ならしめることに依り、叙上、「艦載航空」〔航空母艦〕より來る「客觀的範疇」の迫力を解消し、恐怖を一定量以下に低減することが可能なのである。

「雷擊機は、殆んど如何なる天候でも空中作業を營むことが許容し得られる。例へば低い濃霧が立ち罩めて、本機の出發が不可能ならしめられることは、むしろ例外でなければならない」。爆擊機は攻擊を受け易く、D・C・A〔地上高角砲〕の反動に暴露せられるけれども、「雷擊機は海面に接近して飛翔するから、下方から來る攻擊に對しては庇護せられてゐる」〔前方から來る敵の驅逐機に對しては機關銃で擊退することが可能である〕、「雷擊機は爆擊機のやうに、投下に好都合の點に達する爲め、殆んど一定の航路を持續することを餘儀なくせられない。その運用操縦に惠まれて、容易に營み得る稲妻形の行進は、かへつて水平的防禦射擊と敵の空中反擊とを回避せしめる便があらう」。殊に急降下爆擊機が雷擊機に對して射擊を試みる場合、「敵の機關銃は、海面に自ら粉碎するの危險を冒さないで、それを持續することが出來ない」、最後に「雷擊機は

爆撃機のやうに高度飛行の必要がない〔爆撃機が必要とする高度に達するまでに、すくなくとも三十分はかゝる〕こと、等々のハンディキャップを有してゐる。

それで專門家の間には、「甚だ近き將來において、實現せられさうな飛行機型さま〳〵の内で容積が限られた航空母艦上においては、多數の雷撃機が、利用せられるであらう」とさへ考へられてゐたのである。航空母艦上の、利用機能における軍事的收獲は、しかしながら單一なものでない。それが故に「高空を飛ばねばならない爆撃機を多數の雷撃機を以つて置換へる爲めに、これを除外することは淺薄である。――この論結は蓋し論理的に見へてゐる」。しかり、これはかなり重要な論理的の論結である。なんとなれば、あらゆる飛行機型は、こぞつて最終の無際限の航空自律性を保有する「飛ぶ船」にむかつて志向せしめられ、それ自らの存在價値を解消せしめるであらう、と信ずるのは甚しき誤謬である。あらゆる飛行機型が、種別・型態の如何を問はず、それに獨自な「存在價値」と「構成體系」とを示現する限り、これはかれに讓る何物をも持ち合はしてゐないことが、すくなくとも現象學的に理解し得られるのである。

われ等は〈gens togata〉〔トーガを着たローマ人〕でない。よしトーガを着ても、〈homo homini lupus〉〔人間同志は狼である〕といふ「現實」は、變更し度くても及ばないのである。〈si vis pacem, para bellum〉〔平和を希求するならば武裝せよ〕――このラテンの諺こそは現時局に寄するわれ等の最後の言葉である。

7) 空軍の策動といふ現象は、あれ程密接に入り込んだフランドル海岸から生れた。カタパルトの發明は、空軍の策動を、この狹隘地帶より外海にまで擴張したのである。「驅逐水上機はヂープルツゲでドイツの發明したものであるといふを好まない。しかし攻撃的驅逐水上機の、海上における秩序的使用の嚆矢であつたことは止むを得ない〔P・バルジョウ〕。

8) Cf. 〈La difèense contre les avions-torpilleurs〉 La Revue Maritime, No. 159. Mars. 1931.

一

世界大戦中、ドイツ海軍の脅威に暴露せられた協商國側の商船隊が、いはゆる無防禦の「牛肉の旅」――即ち〈Beef Trip〉を餘義なくせしめられたことに就いては、J・C・ポールムは下の如くにいふてゐる。「この當時の海戦では、敵の潜水艦に對して十分な效果を發揮した防禦方

法は、ルイ十五世・ルイ十六世およびナポレオン時代の方法と何等の増減もない。即ち船列航海に外ならないやうであつた[1]」云々と。それで九ノット以上の平均速度を出し得るものと、それ以下の平均速度しか出し得ないものとのグループふたつに分ち、軍艦を以つてこれを護衛した。

われ等はこの記述を通じて、ひとつの命題を把握することが出來るであらう。即ち往古の軍艦が進化して近代的のものに轉形し、潜水艦の出現となつて、攻撃力が著しい伸展を遂げて來たのに對比して、防禦力は依然として、中世紀の方法が墨守せられてあつた、といふ事實である。飛行機の如きにありても攻撃的諸因子が強調せられ、こゝに航空戰の華形である〈Hell Divers〈〔急降下爆撃機〕となつて脅威を逞ふしてゐるけれども、高角砲は必ずしも、それに順應して威力を増さなかつたのである。攻撃機には元來、相互に背反せる矛盾因子が含まれてゐる。即ちそれの攻撃性能——V・バルジョウのいふ戰鬪自律性[2]を増加せしめようが爲めに、勢ひ機型および搭載量の擴大を計らねばならない。しかるにこれを充足すれば、すくなくとも軍用飛行機としては、ヴアイタルな因子である「高速度」といふ別箇の條件との食ひ違ひが生ずるのである。しかも近代における流體力學研究の成果は、この矛盾を止揚しつくし、稍々完全に近い程度において解消を遂げ、ます〳〵高度の性能を有つ飛行機を實現せしめることに、歴史的の成功を告げたのである。けれども一方、この止揚過程は必ずしもD・C・A〔高角砲〕のそれと一致しないのである。即ち防禦・破壊性能を高からしめようがために、砲身の巨大なるものを必要としよう。しかるに高速度において移動する目標の爲めに、砲の操作は、ます〳〵これを焦燥であらしめねばならない。——この相互矛盾を償還することは困難であり、果敢な攻撃・戰鬪機は、おのが目的を達した後で、隼の如くD・C・Aの砲身をかすめて根據地に飛び去るのである。

この事實は一見、かのアメリカの哲學者ジョン・デユウェイが提唱にかゝる〈There is an adaptation of the stimulus each other〈の理論[3]と衝突したかのやうな形となつてゐる。元來、飛行機は立體的に「飛翔する大砲」であつて、水平的にしか移動することの出來ないD・C・Aとは、絶對的にその依屬する範疇を異にしてゐる武器なのである。立體的武器に對應するものは、やはり立體的武器そのものゝほかの何物でもない。これは現代において、最も重要な認識のひとつであつて、この認識を缺如したが最後、直ちに總括的敗北の運命は戸口に殺到するであらう。これを明瞭に是認するものは、イタリイのドウェ將軍である。將軍に從はゞ、敵空軍の襲撃

に對しては、すべからく空軍を以つて對應すべく、D・C・Aはいはずもがな（更に聽音機・照明隊）、戰鬪・爆擊を目的としない「補助」航空でさへも、無用・餘分ないし危險な手足まとひであると看做し、左のやうな諸テーゼを壯快に樹立してゐる（V・バルジョウの記述[4]に依る）。

1　空中戰の根本の目的は、「制空權」の把握に依存する！

2　國民航空勢力の最大收穫は、すべてを綜合して何等の例外を許さず、一個の獨立した空軍を組成することに依つて獲得せられる。

3　この空軍は、その目的を達する爲めに、大量の「戰鬪機」を以つて組成せられてあらねばならぬ。

4　他の飛行機にして「補助的」性質を帶ぶるものは、空軍において無用・餘分ないし危險である。制空權を獲得しない時は、これを使用することが出來ないから「無用」となる。一旦敵空の支配者となれば、敵はもはや飛翔することが出來ないのである。わが空軍はこれに對し、戰鬪機を以つて行動するものであるから、この種の補助機は餘分のものとならう。また

これを空軍の一勢力中に加ふれば、かへつて制空權を獲得する機會を減少する恐れがあるので、「危險」なものとならう。それ故に、「獨立」空軍を組織する爲めには、「補助」航空機は、これを廢止することを必要とする（傍點筆者）。

V・バルジョウは、これ等を檢討して「この結論は、少々大膽であるやうに見えてゐるけれども、いまその出發點（即ち「空軍獨立」および「空中戰」の諸學說）を是認する以上は、論理的のものであるかのやうに分明する。制空權は、空軍に取つて獲得しようとする本質的目標である」といふてゐる。即ちドウェティズムの目標とするところは、絕對的の「空權」制覇であるけれども、V・バルジョウはこれを相對的に解釋し、「われ〳〵は制空權なる語が絕對的の觀念でなく、極端なる比較的・暫定的・局部的な或物に對應することを、しかしながらまた、これ（絕對的空權）を實現せしめようとして努力し得べき、或る理想的狀態の一種類を表現するものであること等々を理解してゐる」といふてゐる。――ドウェティズムは、眞一文字に絕對的空權の把握を措定して、以上の諸テーゼを樹立したのであるけれども、V・バルジョウは、それに達する一

段階として、相對的空權の價値を是認してゐるのである。空權に對する絶對的・相對的の區別は、こゝに「補助」航空の無用・有用論を導き出す岐路となる。そのいづれにしても、しかしながら空軍に對する防衛手段は、やはり空軍を以つて試みねばならない、といふ國防理論の鐵則には、何等の變更を見ることはないであらう。

わたくしはまた、このドウェティズムの可能性を見極めようとすれば、四隣いづれの國家よりも、空襲の危機に暴露せられてゐるイタリイ半島の、戰略的地位を考察しなければなるまい。イギリスに至つては、多かれ少かれ、その狀況を異にしてゐる。『ラ・ルビュ・マリティーム』誌はこれを說明して、左の通りにいふてゐる——。

いまイギリス帝國の問題に對し、貿易の保護が飛行機に依存し得るか〔叙上、大戰中における「牛肉の旅」において——〕。その結果を考究しよう。まづ第一に大イギリス帝國の國防と、帝國外に散在する各領土の防衛との間に存在する主要な差異を理解しなければならない。イギリス帝國の全部は、飛行機を以つてする大陸よりの航續距離内にある。それで敵飛行機は、イギリス海岸に達した時、ドツクおよび工場は破壞せられ、發電所および鐵道は攻擊の目標となり、輸送機能は忽ち停止せしめられるであらう。かうなるとイギリスの海上貿易を保護することは、全く意味を成さなくなる。狹隘な水面において、イギリスの商船隊が、優勢にして卓越した破壞力を發揮する飛行機の襲擊に露呈せられた時、われ等は如何なる護衛軍艦の列に對しても、それの效用に關しては異論をさし挾むのである。故にすくなくともイギリスに關する限り、ちかき將來において、諸島の防備は飛行機に代はることを容認するものである。また現に、海軍力に依つて行はれてゐるすべての任務は、飛行機に歸一するの必要が生ずるであらう。しかしながら、イギリス本國外の各領土および廣袤たる大洋に想到するときは、飛行機は微弱な仕事しか成し得ない……」と。

その必然的歸結として「イギリス島帝國の防備は、ちかき將來において空に依つて行はれ〔各領土を包括して〕イギリス全體の防備は、海軍に依つて營まれなければならない」理由が肯定せられて來よう。——以上二樣の海防理論に照破して、最も複雜な立場に立つてゐるものは、わが日本である。西北に茫莫たる大陸を控へ、東に廣袤たる太平洋を望むわが日本は、イタリイとイギリスとの、双方の事態を奄有してゐるのである。それ故にわれ等は、「絶對的」な制空權を把握

すべき强力な空軍の整備を痛感せしめられてゐる一方、この「絶對的」制空權を目標として、殺到するであらう敵の水上勢力〔航空母艦〕を撃滅すべき「補助」航空の必要をも、ともに痛感せしめられてゐるのである！

モーリス・ゼルニイは「補助」航空の本質を說明すべく、「近代の艦隊を構成する要素中、最も重要なるものゝ一は、確かに航空である。航空は、遲緩な艦隊と連結して、屢々、その一部を構成してゐる。これ卽ち水上航空が艦隊に對して、眞に獨立を許容すべき進步に達することの、なほ遼遠なる事實を證示してゐる。詳言すれば三つの觀點から——卽ち航續力・モータア運用の安全性およびその速度である。……金屬化學が進步して、DO—X型の如き多發動機式水上機に莫大な航續力を與ふるディーゼル・モータアの實現を許すであらう曉に、水上艦隊は、もはや航空艦隊の補助たるに過ぎないであらう。航空隊の擴がる速度は、廣莫たる警戒區域の監視を行はしめ、殊に海上に擴がる勝利の攻擊を成し得るものである」といふてゐる。——卽ち「補助」價値の轉換であつて、現代は恰度、その轉換期に際會してゐるのである。

論はすゝんで佳境に入り、「他方において不燃瓦斯を使用し、大航續力を有する大飛行船を、戰鬪機又は照明機の運送として利用すること、および成層圈內の航空は戰爭を遠方に、そして敏速に、しかも決勝的に運んで、水上艦隊は、大航空艦隊の補助機能となるのみならず、また大航空艦隊の華々しい功績に對し、無力な傍觀者たるに過ぎなくなるであらう[6]」といふてゐる。勿論、これはドウエティズムが最大限に現實化した曉を想像したのみで、現段階では、ほんのユートピイにしか過ぎないのである。このユートピイは、しかしながら航空歷史の飛躍を示唆するであらう衝動ひとつとなることはいふまでもない。しかも大飛行船に依る戰鬪機の護送・成層圈內の航空等は、センセーショナルな科學的物語として、識者は看過しないであらう。それは、科學の現段階にありて、すくなくとも多大の確實性において、實現の可能性があるものである。しかもそれの研究は、ひとり軍部限りではない。一般大衆が——必ずや國民全體意識に醒めた學徒大衆が、打つて一丸となり、個々の利害を犧牲となし、尊き研究と發見の一筋にむかつて、營爲しなければならないものである。國民の努力は、ひとり形而上的の領野においてのみ、終始すべきものではない。それが形而下的の工作となつて具現し、それの成果を「測定」することが出來る物體として凝結した時でなくては、決して評價に値すべき或物とはなり得ないであらう。曩に空

軍を道具とする立體的進攻を食ひ止めるものは、おなじく空軍を道具とする立體的防衛のほかの何物でもないことを知つたわれ等は、更にわが立體的裝備をして完璧の域に推進せしめるものは、「國民全體」の意識を越えた何物でもないことが、こゝに認識せしめられるのである。

空軍は、果して進攻的のものであるか、それとも防衛的のものであるか。スペイン國のド・マダリアガは軍用飛行機について、「文明國において、屢々、發生する不安定な平和狀態にありて嘆かはしい心理的結果を生ぜしめるであらう急遽なる攻撃を展開することの、かくも容易な兵器の存在に依り、國際間の政治に、長時日の經過が必要と思惟せられてゐる平和安寧の事業達成に當り、極めて有害にして神經質な雰圍氣を創成せしめられることは、必然的である[7]」といふてゐる。――これは正直に、弱小國民であつたスペイン本位の觀察を吐露したものであつて、強大國民は、いひ換ふれば自國の立體裝備を、或る程度まで成就してゐる強大國家は、わづか計りの空襲には微動だにも感じないのである。軍用飛行機の自重三噸を超えてはならないことを提言したマクドナルド案においては、自重三噸を超過するものを進攻的に解釋する意圖が働きかけてゐるやうである。これ等はいづれも、ソシアル・デモクラートが、机上で揑ね上げた煩瑣論であつて初めから或る目的を持ち、頗る虚心怛懐ならざる基礎に立脚するものである。現に今次動亂の直前、イギリス海軍が擧行した演習において、三戰艦を目標とする急降下爆撃が試みられ、三、〇〇〇米の高度から、時速すくなくとも四五〇粁を超過する速度を以つて急降下を開始し、約六〇〇米の距離から爆彈を投下した。そして機は、出來るだけ速かに上昇した。その結果、「戰艦は機を攻撃する機會がなく――それは高角砲の射撃修正を、著しく困難ならしめるからである」かへつて機に爆撃せられる機會の多かつた」事實を證明し得てゐる。それと同時に、該演習において「防備軍の航空は、海軍の豫期以上の成果を收めることが出來た[8]」のも明白な事實であつたことを想ひ合はすがよい、して見ると該演習では軍用航空に關する限り、攻撃・防禦といふ觀念の傳統的對立が、すでに無意味である事實を證示したものであつて、敢へて自重三噸といふ分界線に拘泥はることなく、最も性能高き飛行機は攻撃・防禦の背反せる二因子を、最も高度の段階において併有してゐることが、こゝに認識せしめられてゐるのである。

軍用航空は、こゝに攻撃的・防禦的といふ機能的對立を清算し、更に軍部・民間といふ職業的對立をさへ解消せしめるの結果となつた。實際、軍用航空――即ち國家の立體的裝備は、科學的

發明・發見の效果を速かに把握しようが爲めに民間技術者の、また高價な資材整備費の供給を絶へず獲得しようが爲めに社會大衆の、理解と支持とを極度的に必要とするのである。それにも增し、國防はひとり軍部のみの仕事ではない。國民全體の防備であるといふ重要な一理論が、特に强調せられ、社會大衆の認識に徹底せしめられてあらねばならない。この際、國民全體の意識とは對蹠し、軍部・民間の職業的對立を激化し、相剋的關係にまで推移せしめようと策動するソシアル・デモクラートが見出されてありとすれば、それは「敗戰」を目的とする共產主義者と合流するものであり、われとわが墓穴を掘る異端的分子である！　たゞそれ黨派的對立はいはずもあれ、個々の利害を超越し、しかしながら空疎な觀念論的神學の侵淫よりは蟬脫し、ひたすら健康な「國民全體」の意識に一切を更始し、蒐積し得た體驗・叡智および技術の全部を傾倒し、國家が切迫的必要性を痛感し續けてゐる一尖端において具現せしめ、「歷史的」な機械工作を成就することの出來た國民の手に依つてのみ、國家全體の立體的裝備は達成せられてあるのである。

「國家の航空なるものは、何から成立してゐるか。それは國防の要素および交通の新方法である」[9]といへるは頗る明言であらう。しかるに交通の新方法――卽ち民間商業航空が、第二線として國防そのものに包攝せられること、商船隊よりも、いやはるか可能性に富むことを知らねばならぬ。フランスのヂャーナリストが、その航空相P・コットに對し、「空中戰の方策――如何にそれは、複雜なものであることか！――に從つて營爲し續けた航空の發達は、確かた仕事を成してゐる。航空諸施設も國家の手に依つて支持せられ、しかも外に眞實の、ないしは想像の假想敵國が存在し、內に航空諸施設急設の必要が叫ばれ、納稅者が『痲醉』してゐる限り、着手すべき仕事は澤山にある。航空軍備に關する急を認め、財政上の方法を決定すべき大臣が――定義に依つて――果してよい大臣であらうか」[10]といふ批評を突きつけてゐるのは、「ヨーロッパにおける戲曲」〔卽ち戰爭〕の勃發を解消しようが爲めに、航空を國防第二線たるの立場より、奪還することを期持してゐる「平和主義者」であつて、敢へてフランスといはず、他國におるソシアル・デモクラートと、多大の共鳴性を見出し得るものであらう。ドイツの意志は、しかしながらこれと對蹠する。ドイツは、飛行機および商船の領野において「統制」の效果を極度的に發揮し、フランス人G・ド・ローランをして「垂直および水平の方面において、ドイツほど統制を進めてゐる國は、世界いづれにもない」[11]といはしめるに至つた。何故か。マクドナルド案〔空軍縮少に關す

る」を註釋したナドルニイがいふ通り、一國の軍事組織は地平線防備と、垂直線防備とを必要とするからである。――これに依つて、わが國の非常時意識に近き心機にあつた「ドイツ聯邦の航空省が、フランスの航空省よりも、一層重要に豫算を取扱つてゐた[12]」事由も首肯し得られて餘りあらう。

民間航空は、軍用航空と、紙一枚の隔てさへもが認められてゐないのである。したがつて「航空」は、あらゆる專門層に發達した技術を連衡し、軍部と民間とを合縱する契機である！

1) Cf. ＞Une Histiore Inédite de Sous-marine＜ ――Le Yacht. No. 2617―2618. 20―27/Mai. 1933.

ドイツの＞U-boot＜活躍は、頗るめざましいものであつたが、時としては、かなり遺憾なものもないではなかつた。例へばアフリカ海岸を荒らす目的で、ドイツを出發した＞U―154＜號の如きは、リベリア共和國の首府を砲擊して、フランスの海底電信局ほか若干の家屋を破壞し、黑人若干を殺害したほか、「小歌劇の砲艦」然たるもの――卽ちロートシールド家の「エロス」第一號かを改裝したもの――の船底に、穿孔したに過ぎなかつた。しかるに該艇は、數多の商船を擊沈してゐるので、フオン・チルピツツ提督が認めてゐるやうに、「新らたな怖ろしいものを與へ得た「精神上の效果」は、十分にあつたのである。

2) 參照、本書二五五頁以下――。

3) John Dewey, Democracy and Education, 1920. p. 29.

4) Lieut. de Vaiss Barjot. ＞Reflexions sur la Guerre Aèro-Navale＜ ――La Revue Maritime Avril. 1931.

――これ等の諸テーゼより、かのド・レスケーユが摘記したやうに「基礎的の思想は、空軍が地上および海上の目的物に對して絕えず有力な行動をなす爲めに、制空權を獲得することは必要である」とか、「征服する爲めに戰はねばならない」とか、「勝利は大部隊にある」とか、「目的の獨占は大計畫の機密である」とかの痛快な諸提唱が生じて來たのである。むかしマセドニア人は長槍を工夫して、いまゝでの戰術を轉形せしめた。今は軍用飛行機が、その役割を成すであらう。「若いトルコ主義」は、それだからして永久である！ Cf. ＞Le Douhetisme, Foyer Pattrogéne＜ ――La Revue Maritime. No. 121. Mai. 1933.

5) 「海軍力に於ける航空の任務」と題して、『ラ・ルビウ・マリテイーム』誌所載。

6) ＞Marin et Aviation＜ ――Le Yacht, No, 2600. 21/Jan. 1933.

7) 〈Cf. Plan Mc Donald et le Désarmemente Aéronautique.〉——L'Aéronautique. No. 171. Août 1933.

8) Cf. 〈Avions contre Navires〉——Le Yacht No. 2632. 7/Oct. 1933.
また L'Aérophile. 41. année No. 3 Mars. 1933 には M・S・Dの署名を以つて、これと全く正反對の題名を附した小品が掲載せられてゐる〔〈La Marine contre L'Aviation Maritime〉。これはオランダの謀反巡洋艦「ド・ゼヴン・プロヴインシェン」號に對する飛行機に依る爆撃の攻撃價値に就いて注意を喚起してゐる。そして三、〇〇〇米から落下する五〇〇 kg. の爆彈は、一二四mm の裝甲を貫くこと、アメリカ人は一、八〇〇 kg. の爆彈にして、一、〇〇〇 kg. の爆藥を裝塡するものは、如何なる戰艦をも爆破するに足ると信じてゐること、等々有益な記事が見出されてゐる。

9) Cf 〈La Suppression du Ministère de l'Air et la Réalité Aéronautique〉——L'Aéronautique' No. 154. Mars. 1932.

10) Cf. 〈Minisfère de l'Air et Défensè Nationale〉 par H. B. L'Aéronautique. No. 66. Mars. 1933.

11) Cf. 〈L'Allemagne et la Concentration〉 Le Yacht. No. 2614. 29/Avril. 1933

12) 『ル・マタン』紙、一九三三年二月二十四日。前引H・Bの評論所引。

落下傘降下部隊戰技の形而上學的基礎

最近、世界の軍事界における最もセンセーショナルな問題は、ソヴェート聯邦赤色陸軍の創案にかゝる新戰術即ち落下傘降下部隊のそれであらう。これはひとり、軍事界の問題たるのみではない。この新戰術の目的とするところに徵し、非軍事界に屬する社會分野の各層に至るまでも、かなり廣汎にして深刻な、そして「破壞的」な作用を推及せしめるに足るものである。それが故に落下傘降下部隊——即ち「デツサント部隊」の戰術は、社會科學的見地から論じても、檢討に値する或物を、われ〳〵に提供してゐるのである。

由來、赤色陸軍の指導者は、決して辭義通りの防禦それのみに拘泥せず、かれ等はむしろ進攻において防禦の十全な擴充を考察してゐるものらしい。赤色陸軍の兵士達は休暇中は「レーニンの傍」〔俱樂部〕にありて休憩し、戰時に際しては「敵國内に内亂或は革命を釀さしめる爲め、强

力な宣傳を試みる」[1]のである。――かのスターリンが「われ等の外交に實力を帶ばしめる爲め、われ等は歐洲諸國が試みるやうに、決して陸軍を行使しない。われ等の外交遂行の爲めに行使するものは、何時でも整備の整えられた空軍である」[2]といひ、「外交」とか「外交遂行」とかの美辭を以つて擬裝せる言葉も、畢竟、敵國内に政治的カタストロフを勃發せしめ、これを敗戰に導くことを意味せるに外ならぬ。この目的を達成する爲めに、現代のソヴェート聯邦は往時のコサック師團の代りに、機械化師團若しくは攻擊的空軍を使用するであらう。即ち「攻擊に際して戰鬪力の高き要素は飛行機の多數と高速度戰車とである。これ等のものは將來の戰爭において、敵殲滅の爲めに、主要な役割を果すであらうことは疑ひを容れない」[3]と。〈Woina i Rovoluzija〈誌一九三三年一月―二月號〉。

1) 〈La Puissance Militraire Sovietique〈 ――L'Illustration〔N° 4852. 29/Fev. 1936〕
2) Vgl. 〈Der Luftverkehr in Sowjtussland〈 von Major (E) L. Schüttel.――Luftwehr, Bd. 3―N. 12.
3) Op cit. L. Schüttel 所引。

こゝで注意せねばならないのは、一九三六年八月二日コミンテル派遣員が世界に向つて呼びかけて「ソヴェート聯邦の敵は、ソヴェート・ロシアの飛行家に國境なるものを强制することが出來ない、といふ事を知らねばならぬ」[4]といふた物凄き言葉である。この言葉と、以下に譯出したL・ヒューブナアが、その論文の冒頭に引用せる新聞報道卽ちミンスク附近で、問題の「デツサント部隊」が大活躍をしたロシア秋期大演習の時、共產黨中央委員會書記アンドレエイフが軍隊に對して、「われ等は敵をソヴェート・ロシア國境外、遠隔な處で擊滅するであらう」[5]と表明した言葉とは、さながらに契合するものがある。これこそ正眞正銘の「進攻」宣言であつて、責任者のそれとしては、未だ曾て聽かざる傍若無人の意志表示でなくてはならぬ。またこれこそ世界平和と人類福祉とを侮蔑に附し、文明史の根柢を掘りかへし、これを悲劇化せねば止まない惡魔的綱領であつてソヴェート聯邦に接壤し、若しくは近接なる諸文化國家が、協定その他の形式において腕を組み毒素の横流に對して共同の防衛策を講ずるは至極當然の事であり、文化國に課せられた「文化義務」でもなければならない。

惡魔的綱領である「進攻」政策は、形而上的〔思想的〕・形而下的〔軍事的〕の二つの意味におい

て行はれる。そしてソヴェート聯邦の指導者は、そのいづれの意味においても問題の「デツサント部隊」こそ、他のいづれの部隊よりも、その目的を達成する上に好適し、少くとも機械化師團・戰車隊の先驅者として、最も鋭尖な機能であると思惟したのである。即ち敵戰線の遙か後方に相當の裝備を有せる一部隊の歩兵——即ち「航空歩兵」〔Luftinfanterie〕を落下傘に依つて降着せしめる。降着を了した「航空歩兵」は迅速に集結し、奇襲を行ひ、主として敵の飛行場を奪取し、こゝに「戰鬪細胞」〔Kampfzelle〕を創始する。次に輕砲・戰車その他の戰鬪資材を空輸し〔もはや落下傘降着の方法に依る必要がない〕、天から降つて地に植え付けられた「細胞」を強化する。かくして敵の兵站—交通線を爆破し、その作戰計畫の順調な進捗に、齟齬を來さしめる程度の微溫的なものに止まらず、すゝんで「細胞」は「敵戰線の後方に〔向つて働きかけ〕更に別戰線を創始し、敵國内のプロレタリアを膨大せしめて、内亂の國内戰線を形成せしめる」[6]のである。

4) 5) Op. cit. ＞Der Luftverkehr＜

6) Op. cit. ＞La Puissance＜

如何にもこの戰術は、ソヴェート聯邦將兵の「熱烈性と執拗性と、同時に諸兵器の思慮ふかき使用」とに出發してゐることは眞實である。戰爭は、しかしながら殊に、相手次第である事に想到すべしである。主觀的構想にのみ沒頭し、遂に客觀的事物を認識するの聰明性を無くした＞Machist＜の營みは、辯證法的唯物論者の特に排擊するところ〔——N・レーニン[8]〕。敵戰線の後方に「戰鬪細胞」なるものを不意に獲得し、更にその後方に「内亂の國内戰線」を形成せしめるとは、餘りにも手際よく作り出した公式ではないか〔Bravo!〕。マルキシストの公式癖が、かかる點においてまで露呈せられてゐるのを見てわれ〳〵は失笑を催さずにゐられない。われ〳〵はこゝで「矛盾があればこそ信賴する」といふラテンの諺を想起する。その逆は「確實すぎるから信賴することが出來ない」といふ事にならう。世間の事物は確實化すべく、あまりに矛盾が多過ぎ、これを公式化すべく、また餘りにも複雜であつた。相手がスペインの如く、國内において「人民戰線」が形成せられてゐる國柄ならば、また自ら別個の問題である。なんとなれば榮養不

良に陷れる共産主義者達の、みすぼらしい寄せ集めにしか過ぎぬ「人民戰線」こそは、天より降り來る赤色の「戰鬪細胞」を歡迎する唯一のものであり、それを仰視すること恰も大旱に雲霓を望む如きものがあるかも知れない。しかれども左樣なものゝ片影だにも存在せず、一絲亂れざる國民的統制を維持せる文化國に對しては、折角の「戰鬪細胞」も植え付けられるに先立ちて、陽光に直射せられたペスト菌のやうに撲滅せられて了ふであらう。

マルキシズム海軍政策の戰術は、水面上〔輕快艦艇〕――空中〔飛行機〕――水面下〔潛水艦〕の三兵力より成る「結合攻撃」[9]〔attaque combinée〕といふ理念において打ち立てられてゐた。ソヴエート陸軍は、この理念を陸上に推及し、爆撃機―戰車の二者を以つてする「結合攻撃」を考察し、こゝにその強みが認められたのである。しかるに「デツサント部隊」は降着後、何等の援護兵力をも隨伴しない孤立の陸上部隊となり畢せ、戰術上、その「獨創性」なるものを喪失する。また該部隊は「奇襲」を生命とするけれども、これは例外的の成功を期待し得るのみであつて、高度の訓練を有し、用意周到な敵に對しては、何等施すべき術もなくなるであらう。

7) ――これは特に海軍に就いていふた言葉である。Cf. 〈U. R. S. S. Marine de Guerre〉――La Revue Maritime, 〔N° 191 Nov./1935〕。

8) Vgl N. Lenin, Materialismus und Empiriokritizismus. Einleitung.

9) Cf. Op cit.〈U. R. S. S. Marine〉

ソヴエート聯邦内においては、今やパラシューターアの大量養成に大童の體爲であるのを見ても、この「デツサント部隊」の整備充實に、戰術の重心を見定めてゐることが證示し得て餘りがある。該新部隊の整備充實に關し、獨逸の報道に據らば、ソヴエート聯邦の新設兵力として有名な「航空步兵」即ち落下傘降下部隊は、今度、空軍總司令官の麾下より完全に分離獨立せしめられ、ソヴエート聯邦軍事委員會の特別命令を受けることになつた。また各部隊は、それ〴〵專屬の航空廠を有し、各部隊が必要とする獨自の飛行機を製作せしめることになつた。各部隊は各部隊毎に獨自の戰術を考慮してゐる。殊にモスコウ軍部は、こゝに落下傘降下戰術に附隨して、全然新規な兵器を製出する意向を有してゐるさうである。各部隊は全聯邦に亘り、各地に配備せられる筈。――即ちモスコウ、レニングラード、キエフ、ハルコフ、ミンスク、ペンサ、オレンブ

ルク、オデツサ及びウラデイオストツクである。これ等の新部隊の設置及び維持費は莫大な額に上つてゐる由。[10]

かく戰列部隊を整備するのみか、豫備員を充實すべく、競技としての落下傘飛躍に、ソヴェート青年の心魂を陶冶してゐるのである。その詳細は、『プラウダ紙』[11]〔一九三六年四月十三日〕に發表せられた數字的報告を通じて推知することが出來るであらう。――即ち聯邦内には約四百のパラシユート塔が存在してゐる。また飛行機よりの降下數は最近の二箇年間を通じ、延回數二萬一千回に達してゐる〔即ち一箇月八七五回〕。「パラシユータアは、ソヴェート聯邦青年の優秀な一部隊である。何故ならばパラシユート競技は、偉大な國防的意義を有する同時に、鐵の如き神經と、鋼鐵の如き意志とを涵養するに役立つからである」〔傍點筆者〕。

かれ等は「鐵の如き神經」と「鋼鐵の如き意志」とを以つて、「祖國」に忠ならんことを欲してゐるのである。ソヴェート聯邦の軍人社會では、最近まで「祖國」といふ言葉を怪しからぬものとして、口にするものがなかつた。これは多分、N・レーニンの論稿[12]に記載せられてゐる通り大戰當時、ロマノフ王朝の人々が大露西亞の「祖國の護り」といふ標榜を振りかざし、遂にポーランドやウクライナの咽喉元を締めつけたのに懲り、累が「祖國」の文字にまで及んだ爲めであらう。しかるに一九三四年六月、赤軍官報『赤い星[13]』の社説において、明瞭に「祖國」の定義を與へ、〈La Rodinou! ……〈〔祖國の爲めに!〕といふ言葉を表題として掲げてゐる。封建的桎梏下にあつた中古の騎士は、それでも「自分の宗教と、そして祖國との爲めに」〔pro aris et focis〕、華々しくも劍戟を執つて立つたのである。今日の、明日のソヴェート軍人及び青年大衆は、ほんの二、三人の――たとへばスターリンの、カガノウキツチの、オルジョニキゼの獨裁下にある「祖國」のために惡役となり、或は西歐にむかつて蒙古人―韃靼人的侵略[14]を準備し、或は國境外はるかな處に「戰鬪細胞」を植え付けようが爲めに、落下傘より飛躍する新戰術を學ばしめられてゐるのである、あの犧牲的な〔!〕。

10) Vgl. Luftwehr, Bd. 3—N. 12

11) 『露紙抄譯』〔日露協會發行――昭和十一年五月三十日〕第二四三號より引用した。また『プラウダ紙』〔一九三六年十一月二十四日〕には、トハチエフスキー元帥の所説として「赤・

軍は技術を高く評價し、且つこれを熱愛してゐる。そして技術の獲得と人材の育成とに鋭意努力する事は赤軍調練の一般的特質となつてゐる」といふ言葉が讀まれてゐる。〔同上第二六三號――昭和十二年一月十日發行〕。なほ最近、モスコウに建設せられた二個のパラシュート塔は、三〇乃至四五米の高さである。〔Luftwehr, Bd. 3—N. 2 ＜Kurznachrichten＞〕。

12) Vgl. N. Lenin, ＜Ueber der Nationalstolz der Grossrussen＞ ――Gegen den Strom. S. 31.

13) Op. cit. ＜La Puissance＞

14) 拙稿「蒙古―韃靼人の西歐侵略說」〔『海防』第十四卷第五號所載〕參照。チェッコスロヴァキアとソヴェート聯邦との空軍合作說の眞相に關しては、Cf. ＜Czechoslovakia and the Russian Menace＞ ――The Aeroplane〔2/sept. 1936〕。〔これはもと、チェッコの航空雜誌＜Letectvi＞に掲載せられた小篇で、二國合作說は虛構の事實であることを述べたものであるが、＜The Aeroplane＞誌編輯者〔C・G・グレイ〕は飽くまでも自說を固持し、「ロシア人はパリの酒と女とを所望して、途をチェッコスロヴァキアに取らないものとも限らないだらう」と附記せるは皮肉も極まれりである。

落下傘は十六世紀頃、レオナルド・ダ・ヴインチに依つて實驗せられた不可思議な發明であつた。中世紀以降、征空の念默し難く、續々として歐洲の碧空に怪奇な姿を現はした不完全な氣球乘組員は、落下傘に依り辛き一命を拾つて歡喜した。その後、絹布で造られた落下傘が出現するに及び、幾多の人命を救ひ得たのである。[15] ――それは何事であるか、人命救助の天使的道具が一轉して、かくも物凄き惡魔的道具となつたとは〔!〕。しかるに諸外國の文獻に徵するに、いづれも「デツサント部隊」の惡魔的役割を叙述し〔多少の恐怖心も手傳つてゐるのであらう〕、相手方戰線の後方に植え付けられた「戰鬪細胞」が、如何に働きかけるかを說明すること頗る雄辯なものが認められてあるけれども、それを如何にして防禦すべきかの重大問題に言及せるものは甚だ少いのである。ひとり以下に概要を紹介するヒューブナア〔Lutz Hübner〕の「落下傘降下部隊の戰鬪」〔Die Bekämpfung von Fallschirmtruppen〕と題する論文[16]は、該部隊の機能を明晰にし、その防禦法を具陳せるを珍とすべしである。

15) Cf. Mon Avion et Moi, par Charles Lindbergh. 1927 p. 122 ff.
落下傘で命拾ひをした飛行軍人等が相あつまり、記念として蠶倶樂部〔Club du Ver à Soie〕を作つたといふ記事がある。落下傘が絹布製であるので蠶の名稱が附せられたのであらう。――かう

したユモラスな挿話にも、かれ等が命拾ひをした歡喜の情が表現せられてゐる。

16) Luftwehr, Bd. 3—N. 10.

「ミンスク近郊で施行せられたロシアの秋期大演習の過程中、〔一九三六年〕九月九日には空軍の大活躍があつた。敵前線より一七〇粁も後方へ、飛行機より人員一、二〇〇名と機銃一五〇挺、砲一八門とを落下傘にて降下せしめて、その地點を占據した。しかも軍隊・機材を降下せしめるのに十分もかゝらなかつた。

「この新聞報道は、叙上、落下傘降下戰術の目的と範圍と、そして效力との問題に對し、顯著な光明を投ずるものである。前年度における落下傘飛躍の成就に關する新聞報道に據ても、すでにその大部分が知悉せられてゐるのであるけれども、更に近頃、諸外國の新聞雜誌は、高い程度において落下傘部隊の問題を取扱ふやうになつた。しかるにこれ等の諸刊行物は、專らかうした部隊の攻撃と、攻撃の遂行とが及ぼす影響そのものゝみを觀察する事に一致を見てゐて、かくの如き攻撃は、如何にして防禦すべきかの問題を、等閑に附してゐるのである。勿論、各種刊行物に[17]は、防禦方法に就ての意見が散見してはゐるけれども、實は全問題とても今や發達の過程にあるのであるから、各種の意見は未だ一致を見るに至らず、忽ち直接の矛盾に逢着することがあるのも、怪しむには足らないのである。以下、落下傘部隊の戰鬪能力の實狀を明かならしむべく、諸外國の新聞雜誌の鏡に映じた姿のまゝを叙述し、研究を試みることゝしよう。〔傍點筆者、以下同じ〕。

17) ——たとへば L'Aerophile, Jan. 1837 に〈L'Aviation d'empire de L'U. S. S. と題する大論文が出てゐるが、これに依つて見てもキーエフ大演習に論及し、この方法〔即ち落下傘降下〕の志氣に及ぼす效果と、破壞力との等閑に付すべからざるものゝあることを說いてゐるが、その防禦法に就いては、未だ何等の對策が發表せられてゐないといふてゐる。

「新攻撃手段の適用は、それに相應した防禦方法の擴充を條件づけるであらう。しかしながらかうした防禦方法の擴充は、この新攻撃手段の目的と特質とを認識するといふ基礎に立脚してのみ可能なのである。この事は關して先づ次の事柄が確定せしめられよう。即ち落下傘部隊、いはゆ

る「航空歩兵」〔Luftinfanterie〕は突然に、いひ換ふれば出來るだけ感づかれずに、敵戰線の後方に着陸し、たとへば交通要路・兵站倉庫及び空港のやうな軍事的に重要な地點の守備隊に奇襲を加ふる事に依りてこれ等を奪取し、次に「戰鬪細胞」〔Kampfzelle〕一單位を、そこに植え付ける。この「細胞」は、落下傘に依つて降着せしめられ、十分な裝備を有する歩兵部隊に依つて一層に强化せしめられ、飛行機着陸場を手に入れる。さてその次に、飛行機に依つて輕砲・戰車のやうな重い戰鬪機材を空輸し、こゝに着陸せしめるのである。これ等の重い戰鬪機材に依つて「細胞」は更に强化せしめられ、それの奪還に向ふ敵の部隊に對し、反擊を加へるに足らしめねばならぬ。

「かうした突擊の成功は、雷に戰線の前進に止まらず、敵後方の連絡線を遮斷して、敵作戰計畫の順調な進捗を危殆ならしめるのは易々たる事である。少くとも防禦軍にとり、敵に占據せられた地點の奪還に向つて何時でも自由に行動を開始し、自個に適當とする決定を導き出すやうにせねばならぬ。大規模において試みられ、效果に富む落下傘行動は、遂に防禦軍側飛行機の戰術的活用を阻礙するのに役立ち、かくして戰爭の發端において、決定的有利な狀態を導き出すのである。落下傘部隊の效力は、すでに諸外國陸軍の認知するところとなり、眞面目な態度を以て、この戰爭行爲の新技術に向つて研究が開始せられてゐる。現にロシア以外ではフランス、[18] イタリイ、ポーランド及びチェツコスロヴアキア等[19]の國々が、落下傘飛躍の訓練と落下傘部隊の設立とに意を決し、殊にフランスの空相コットの如きは、マルヌ戰役記念祭を機會として、將來の戰爭における落下傘部隊の登場する重大な意義を印象的に力說した。

18) Cf. The Aeroplane.〔18/Nov. 1937〕
一九三六年十月二十七日、フランス空相P・コットはソヴエート訪問の結果、「航空歩兵部隊」なるものを摸倣して、五千萬法の追加豫算を以つて二隊を新設し、ライム及びアルジールに配備することゝした。目的方法はソヴエート聯邦のそれと全く同じである。但し各隊は歩兵科と輜重兵科とよりなり、輜重兵は歩兵を、敵戰線の後方に輸送するのが任務である。また Luftwehr, Bd. 4—N. 2 〈Kurznachrichten〉では、「航空突擊隊」〔Luft-Stosstruppe〕といふ表題で、佛國の「ドツサント部隊」に就き別の報告をしてゐる。卽ち同國の「航空突擊師團」〔Division de la Garde Aerienne〕は二箇旅團より成り、一旅團には重爆擊機編隊・戰鬪機編隊及び航空歩兵〔落下傘降

下兵〕が、他の旅團には飛行艇編隊及び水陸兩用機・重爆撃機編隊が附屬せしめられてゐる。

19) チェッコスロヴァキア空軍は、スコダ工場製作にかゝる近代的なパラシュート塔を所有してゐる。ソヴェートの設計に依つたもので高さ七六米、三五米・七五米の處に飛躍臺が設けられてゐる。そして落下傘降下の訓練が、ソヴェート聯邦士官の指導に依つて行はれてゐたのは、注意に値するものである。〔Luftwehr. Bd. 4—N. 3 〈Kurznachrichten〉

落下傘攻撃に對する有效な防禦組織に關しては、この攻撃の特質を熟知しなければならない。そして前線における防禦の效果を確實ならしめるべく、先づ我が方の弱點を認識せねばならぬ。由來、落下傘行動の優越點は常に奇襲にある。それで敵機に對するめざましい監視哨勤務は、防禦に關する第一條件である。すでに開始せられた攻撃に就いては、その認知がむつかしく、特別の空中偵察は不可能であるけれども、敵機發見の勤務は容易である。そこで落下傘降下の現狀が開始直前に發見せられたなら、敵の運兵機には、わが戰鬪機若しくは高射砲を以つて對應し、それを掃滅するか撃退せしめる事が出來る。落下傘飛躍がすでに開始せられてゐたなら、落下傘に垂下せる人員を、機銃を以つて射撃せねばならぬ。この際、高射機銃は、空中目標物に對する特殊射撃の勤務に順らされてゐるから效果の顯著なものがあらう。降着を了し、集結を見た落下傘部隊に對しては、我が戰線を突破し來つた地上部隊に對すると同樣で、別にその作戰を條件づける新方法とてはないのである。

「いま諸外國の報告に據つて、個々に亙つて記述すれば左の通りである。

「飛行機監視哨勤務の通常の組織は、空間觀測及び敵機發見に關して、何等の變更も擴充も見ない。大飛行編隊の出現に際し、その隊形・列次乃至その他の特徴に依つて、該大編隊が、落下傘部隊の運兵機を交えてゐるかを見極めることは全く不可能である。但し飛行機一基か小編隊である場合、その外表に現はれた特徴〔或は後方の特定地點を目標としてゐる事〕を監視・警戒して落下傘降下の一隊を着陸せしめるか如何を、鋭敏に觀測することが出來るであらう。これは政治的宣傳か、偵察行動か、それとも或る一施設の破壞を目的とせるものである。この落下傘降下の一隊をして無力[20]ならしめるべく、防空司令官には一小部隊が附屬せしめられるであらう。即ちこの方向監視より降下者の着陸地點が自ら確實となり、指揮官をして容易に、適宜の行動を執らしめる事が出來るのである。

20) Cf. 〈The Elying Bear〉 by R. D. Hudson. —— The Aeroplane〔30/Dec. 1936〕
R・D・ハドソンは「天降る軍隊は、平野においてこそ相當の働をするであらうが、獨逸のやうな人口稠密な地域では果してどうであらうか」といふてゐる。また前掲論文〈L'Aviation……〉にも、「ロシアのやうな茫漠たる國土では、この方法も或は有效であるかも知れないが、監視哨の行き亙つてゐるフランスその他の國々では、うつかり落下傘降下などが出來るものにあらず、新戰術も他國では、ロシア國内におけると同じ威力を發揮する譯にゆかないであらう」といふてゐる。——して見ると「デツサント部隊」も、畢竟、本國たるソヴエート聯邦の地理的條件のみを標準として打ち立てられた主觀的のもので、毫も客觀的考慮が廻らされてゐないかのやうに思惟せられる。これでは「敵を國境外はるかな處で撃破する」ことは覺束ない。ほんの掛聲に過ぎないものゝやうである。

「外國の權威者の多くは、飛行機にして大規模の落下傘降下を目的とする限り、飛行の或る區間空中において卓越性を確把し、決して敵の戰鬪機を寄りつかせないのを願はしい事としてゐる。『空軍が勝利を收めた。歩兵が代位した』の原則は、竿頭一歩を進めて『空軍が勝利を收めた。航空歩兵が代位した』となり、敵戰線のはるか後方に占據せられた地點をして、落下傘降着と、もに、更に強力な戰鬪部隊の充實となつて起續せしめるであらう。けれどもこの兩者の場合、奇襲の利益は、遂に失はれてゐるのである。また戰鬪機の相當數量を整備することが出來ない時、運兵機[21]の掃滅・撃退は、常に高射砲隊の任務となる。それで高射砲の效力の見積に就いても、また研究を必要とするものがある。

「次に考察せられねばならないのは、落下傘飛躍そのものゝ特質である。降着部隊が有效な行動を展開する基礎條件は、着陸後、迅速に集結を了する事である。それで着陸は、可及的狹少な區域内において成されねばならぬ。しかる飛行機の最高速度〔時速三〇〇粁＝分速八〇哩〕において、一機平均十二名の降着人員と看做し、かなりの訓練を積んでも、相當廣汎な區域に散布着陸するのである。剩へなほ降着者は氣流の影響を受けて、偏流することは免れることが出來ない。それで攻撃を開始する刹那、氣流關係は、試驗的降着員を飛躍せしめて、吟味を經ることが出來る。そして實踐に際し、適當な集結的着陸を實現するためには、一、〇〇〇米以下の高度より試みる事が確實であるかのやうに思はれる。それで技術的には、もつと實際、高度を保つことが出來ると考へた時でも、一般に以上の高度〔一、〇〇〇米〕を測定して飛躍を試みるであらう。こ

の事實に鑑み、相互に同時的着陸を試みる場合と、別々の高度から飛躍する場合とは、別に根本的差別が生じないのである。それで時期の到來するまで待つてから大高度より飛躍し、最低高度に達した時に、落下傘を開かせる方法も試みられるのである。

21) 〈Air Power and its Employment II〉——The Aeroyplane〔17/Mareh. 1937〕に、落下傘降下部隊は、敵空軍が殲滅せられるか、志氣が粗喪した時に成功するであらうが、敵空軍が儼存してゐる際、その面前で運輸機が、かうした冒險が出來るかどうかは疑問である、といふてゐる。

II

L・ヒューブナアは、「デツサント」部隊に對する消極的防禦手段の一としての、高射砲の機能に說き及んでゐる。

「若し比較的低高度から飛躍が試みられるとすれば、運輸機は、少くとも輕高射砲が射擊を開始するに際し、その好目標とならねばならぬ。運輸機よりの落下傘降下をして、その效果大ならしめるに適當な高度は、また高射砲の命中率を高からしめる結果ともなり、砲の迅速な發射速度は完全にその威力を逞ふすることゝなる。

「また降下者を狹少な局面に、短少な時間内に降着せしめるべく、運輸機の大群が密集した際、命中率は一層に高くなるであらう。それに目的物の比較的少數が、大仕掛で開始した落下傘降下行動の目標であり、目標物周圍の僅少な地點が、落下傘降下に際して問題となるに過ぎぬ。それで高射砲部隊を配して、その地點を固めるのは大して難事ではなく、またさうしなくてもこれ等の地點を爆擊機に對し、輕重高射砲で防禦することが出來るのである。重高射砲兵部隊を使用するのは、特に次のやうな場合に當つて必要である。卽ち地上戰において、歩兵部隊が砲兵を伴ひて前進するやうに、砲兵を以て裝備せられた航空歩兵の襲擊が、强力な戰鬪機編隊の援護に依つて敢行せられた場合である。しかし戰鬪機編隊は、高射砲火に依つて掃滅せられ、剩へ重高射砲隊は落下傘襲擊に際し、高空を飛翔せる運輸機までを擊墜するに相異がない。

「高射砲部隊は、日頃、照空隊との連合演習に依つて、夜間に試みられる敵の落下傘降下行動に善處することが出來るであらう。それでこの降下運動の效果の確實性は至つて少い。夜間、中空

より着陸地點を見極める所作の實質的困難に隨伴して、降着區域を狹めることは頗るむつかしく次に降着者が集結し、地上の障礙物を克服することは、夜間にありては、二つながら非常な難關となつて待ち設けてゐよう」と。

こゝに必要なものは、J・B・クロウフオード中佐の考察した防空手段の計畫的統合であつてこれに依ると高射砲は戰鬪機と連繫して、こゝに始めてその機能を擴充するのである。わがヒューブナアは高射砲の機能を過重視し、戰鬪機を等閑に附してゐる嫌いがある點において、末だクロウフオード中佐のいはゆる「健全にして統一的な消極的防空手段」[1]とはいひ得られないやうである。

22) Vgl. 〈Flugabwehr in Operationsgebiet〉 —Luftweher Bd. 4—N. 5 〔Aus "The Coast Artillery Journal" Heft 1/11. 1937.
また最近、スペインの内亂における航空戰の伸展に徵しても、將來の航空戰において「輕航空」〔戰鬪機〕の必要なことが證示せられたといはれてゐる。〔Cf. L'Aviation dans le Guerre Civile Espagnole〈—L' Aérophile Avril 1938〉。

L・ヒューブナアの所論は佳境に入り、この新戰術が、形而上學的〔志氣〕に及ぼす影響に說き及んでゐる。——「落下傘に垂下してゐる人員に對して高射機關銃火を浴せかけることは、軍人の感情[23]と背反する。なぜなればこの時、敵は無防備の狀態にあるから〔と說く論者もある〕。けれども軍人感情がつよければ強いほど、ます〳〵下のやうなことを辨えておかねばならぬ——即ち「航空步兵」のやうなものを使用する人々の非常な氣力とても、如何なる手段を以つてしてもそれを防禦せねばならぬといふ義務感情よりは強くないといふ事實を。こゝに防禦軍側が、特に防禦に力を致さねばならない弱點が認められる。落下傘ないしは投下せられた物體を射擊する命中率は、目標が識別し難いので考察する餘地がない。航空步兵の「發明者」であるロシア人は、數年前から落下傘飛躍者を射擊する必要を考慮し、飛行機から投下された落下傘に等身大の人形を垂下せしめ、それを目標とする射擊訓練を實施し、こゝから完全な射擊教範を立案した。落下傘に依る人間の降下速度を秒速四米とすると、一、〇〇〇米の高度よりの降下に際し、そこに殘されてゐる射擊時間は四分間內外となる。目標物がほんの僅か偏流し、しかも偏流角度を測定することが出來たにしても、一人の降下者を射擊するに當つては稀有の命中を見るのみである。特

別の注意を以つて、砲火を分つことが有利である場合でも、よく訓練せられてゐる軍隊の機關銃火の働きをさへ、效果皆無ならしめられる事があらう。

1) 〈Gefühl des Soldaten〉は、むしろ「軍人精神」とか「志氣」とかの言葉に意譯した方がよいかも知れない。パラシュートで降下する無防禦の人員を、射撃してはならないといふ道德律は、淺薄な西歐ヒューマニスト達の作り上げたものであるかも知れない。それの倫理學的解釋及び大戰當時の事例に就いては、Cf. 〈On The Ethics of The Air〉 by C. G. G〔ray〕, ——The Aeroplane Dec./12/1934.

L・ヒューブナアの論はすゝむ——。

「落下傘降着の遂行に關する一般概念に就ては、下のやうな結論が與へられてあらう。——即ち各種戰鬪資材〔武器・塹壕器具及び重砲等〕は降下に際し、落下傘が開くと同時に破壞せられ、或は降着を遂げた時强い地表の氣流のために、それ等の支持裝置が甚しき危殆に瀕することがある。各種の戰鬪資材が別々に投下せられた場合、各々は輕微な毀損を被むるに過ぎないけれどもそれ等が集結するのに困難が伴ふ。〔それでこれ等に對し、防禦側の〕重砲砲火は、輕砲砲火の威力を完成せしめる上で、缺く事の出來ないものである。

「すでに降着を了した落下傘降下部隊に對する防禦に關しては、すでにいふ通り、普通の步兵に對すと同じやうに行動を開始すればよい。たゞこの場合、敵はおそらく選擇せられた兵員を以て編成せられ、しかも背水の陣を布いて必死の鬪爭を試みるであらう、といふ事を考慮せねばならぬ。しかも敵の攻擊目標物は、おほく野戰部隊の行動局面より、はるか後方に横はつてゐる事は[2]必然である。それで原則上、敵とおなじ素質內容を具備せる部隊を、そこへ送り出すのは不可能事に屬する。こゝにおいて落下傘降下部隊に對する陸上戰では、機甲部隊を使用する事が最も願はしい。同部隊の武力は、また空中目標物に對する戰鬪にも好適してゐる。機甲部隊は高射砲部隊と協同し、それの警報に接受するや、直ちに第一線に出動することが出來るのである。降着部隊に對する防禦は、高射砲と組織的連繫を維持して當り、この場合、高射砲火は自然、地上目標に向つて注がれる」。

2) ソヴェート聯邦の F. Arshenjunchin と名づける人は、「戰時、飛行基地は前線より三〇〇ないし五〇〇粁以上も後方に設置せられる……」といふてゐる。〈Luftwehr〉編輯者は「飛行基地〔Flugstützpunkt〕の語に脚註を附し、「ロシアでは空港組織内における中央空港を意味する」と注意してゐる。さて「こゝを攻撃する爆撃機編隊司令は、友軍と連合動作を執るか、或は合併することを考慮せねばならない」といふてゐるから、ます〳〵高射砲の目標となり易く、大型の爆撃・輸送機を、敵戰線の後方に飛ばせることは、たゞ例外的の成功を期待し得るのみであるといふ推測が多大の確實性を以て導き出されるのである。Vgl. 〈Kampfhandlungen der Schweren Bomber Gegen die Flugstutzpunkte des Gegners〈 Luftwehr Bd. 4—N. 3〔aus 〈Wjestnik Wosdu-schonowo Flota〈 Sept. 1936〕。

最後にL・ヒューブナアは、落下傘降下戰術と社會大衆との關係に就いて、考察するところがある。これはわれ等にとりて、かなり重大なる課題であるにもかゝはらず、彼は案外あつさりと片付けてゐるのは何故であるか。これでは普通の爆撃機に依る空襲に對する防禦と日をおなじくして物語られるべきではないか。「航空歩兵」は碧空より地上へ觸手を延してゐるが故に、監視・哨・照空隊及び聽音隊のやうな物體機構では、もはや追ひつかないことを牢記せねばならぬ。これを防禦するには、一絲亂れない國民的モーラルと國民的統制との決死的緊張を必要とするのである。一寸の間隙さへもが取り殘されてあつたが最後、「戰鬪細胞」は毒蛇の大群のやうに、そこを廊下として國内に奔馳するであらう。たゞ軍隊と國民とが腕を組み、心を合はせ、擧國一致を以つて構築せられた立體的要塞を以つてこそ、初めて陰慘なスラヴ民族の企みを根こそぎに芟除しつくすに足り、文化國に向つて挑みかけられたかうした手段の、如何に愚かしきものであるかを思ひ知らせることが出來るのである。われ等は東洋的の善良なる部分を保存してゐるとゝもに、西洋文明の洗禮は十分に受け切つてゐる。カザン陸軍大學政治部長と稱する某が、「我等の彈藥は乾燥して居り、我等の劍は鋭利で、我等の眼光は紙背に徹する」[3]と豪語してゐるが、實證するに先立ちて、これをこのまゝに受け容れるべく、われ等はまた餘りに懐疑的であつた。

3) 昭和十二年六月十一日、元國防人民委員部次長トハチェフスキー元帥等八名が、キーロフ條令の下に一括處刑せられ、ソヴェート體制の危機が傳へられた時、同十三日附を以つて發表せられたもの——「ロンドン十四日發同盟」として、翌十五日附の都下各大新聞夕刊紙に掲載せられてゐる。

「場合に依つては、一般民衆と協同動作――主として監視勤務――を執ることが顯著な意義を有するけれども、戰鬪が信じ難き住民區域か、或は占領地域内で行れるかといふ事を考察せねばならぬ。この場合、飛行機に對する監視網が特に濃密であつて、一人の降下者をも見遁さずして一般民衆に警告するから、この新戰術も、問題にはならないのである。

「落下傘降下部隊の使用に就いての問題を取扱ふに當り、そも〳〵の生ひ立ちが無害な落下傘であり、その初期の意義は人命救助にあつたものが、今や重要な軍事上の目的に、應用せられるに至つた事が判るのである。前進し或は中斷せられた部隊に、食料品や兵器その他の物資を供給するに使用せられた方法が、奇襲部隊を輸送する手段となつて轉向を見た。かうした新戰術の範圍が、一層の擴大を見るか、どうかは全く不確實である。これは一に目指した途を通じ、重量のうち勝つた事物の大量を輸送すべき技術上の進歩・擴大が遂げられるか、如何の問題にかゝはつてゐる。かくの如き行動は、巨額の經費を必要とする。〔先づ一時、制空權を獲得するために戰鬪機を、次に攻撃・輸送を開始するために爆撃機を準備しなければならぬ〕。そしてこの失費は、ほんの例外の場合にありて償還せられるのみである。この例外の場合に處するため、防禦軍側ではそれ相應の準備を整へておかねばならぬ。

「行動伸展の初期、奇襲を開始する瞬間において危機が存在する。かうした行動が開始せられるといふことを感づいたなら、誰でも即刻、豫防手段を講じておかねばならない。それで常に滯りなく、從事せられてゐる監視勤務に倚賴し、また人口稠密な地域では、信賴すべき人民と協力して、危機を脱するように心掛けておかねばならない」。[4]――L・ヒューブナアの論稿は、こゝで終つてゐる。

4) 『報知新聞』〔昭和十二年六月三日朝刊〕の「高周波」欄に「落下傘と醫學」と題し、「急降下の及ぼす人體變異」と小見出しをつけ、左の如き記事が掲載せられてゐる。降着後、直ちに急激な行動を展開せねばならぬ航空歩兵にとり、かうした生理的變化は、直ちに戰鬪能率に作用するところなきを得ない。參考として全文を引用しよう――「最近アメリカではパラシュート倶樂部なるものが諸所に出來て、新時代のスポーツとして若い者の間に大いに人氣を博してゐる。これは健康診斷の結果、心臟の健全なもの、感情安定なものと證明されたものゝ外入會を許可されない。これは今までのパラシュートの危險性を全く除いたものといつても良い。ヨーロッパ大戰前後はパラシュートの

實驗時代で、當時は相當に危險率も多かつた。しかしパラシュートはその後非常に研究が進み、航空輸送上、旅客の非常時救助策として是非必要なものであり、その上軍事上にも大きな意義のあるものであるところから、各國は擧つてパラシュートの完成を急いだ。現にソ聯では落下傘軍隊の編成を研究してゐる有樣である。一方パラシュートの構造の進歩と共に、航空醫學上、パラシュート降下の際の生理の研究が目ざましく擡頭した。ドイツの女流飛行家兼パラシュータアとして有名なローラ・スクローテル孃の實驗は、その中でも最も有名なものとして知られてゐる。これは人工酸素吸入器を體に着け、高度七千メートル以上の上空から降下して、その時の身體の變化を自働測定機で測つてゐるが、これは世界的最高降下實驗記錄として航空醫學に貢獻するところ甚大である。事實人間の心臟なり腦髓または血管等が高速度或は加速度を加へられた場合、或ひは空氣密度や溫度の激變・急激の變化を受けた結果、如何なる影響を起すものであるかは殆んど知られてゐない。ところでこの實驗は從來未知な生理現象を知る意味からも、また將來の高速度航空輸送の問題に取つても極めて重要な實驗であつた。大體一分間に一千メートル以上の高速度飛行でも、それから毎時一千メートルの速度を持つたロケツト飛行でも、直線飛行をしてゐる時は人體には何等の障碍も認めない事は實驗せられたが、これ等の高速度飛行機の垂直降下なり旋回飛行にあつては一時心臟が停止することがある。それで人間が耐へ得る加速度は毎秒九百八十センチメートルの八倍位になつてゐる。スクローテル孃は飛行機から飛び降りて約三秒時間、落下距離五十メートルの時、丁度落下傘が開いたためか、心臟の働きが一時停止してゐる。これは開傘するまでは、重い頭部が下方に向き血液が腦天に集り始める時、急にパラシュートが開いて頭部が引起されたので、非常に大きな衝撃を體に感じ、それと共に腦部に集中してゐた血液が急激に進路を變へて、心臟の動悸を止めたと推論せられてゐる。航空醫學の權威醫學博士寺師義信氏は、これ等航空の發達に伴ひ、これ等の現象は從來の心理學者・生理學者が全く思ひも及ばなかつたところであるが、これ等を研究し、充分に理解を求めることは現代人の責任であると述べてゐる〔光電管子〕。

ヴオロシロフは、このやうなことをいふてゐる。即ち「落下傘降下は、「たゞソヴエート・ロシアにおいてのみ、ソヴェート體制を根柢として、「かく嵐の如き發展を遂げ得たのである！」〔Lot Polski／Oktober 1936〕。從つてこのやうな體制を有しない國々には、落下傘降下戰術は發達しない、といふ結論が導かれて來よう。

これには一面の眞理が罩め宿されてゐる。過ぐる上海郊外廟行鎭の戰鬪に際し、「爆彈三勇士」を出した國民の如きこそは、何等强制せられることなく、身を挺して祖國の爲めに殉ずる赤誠を

歴史的にまた傳統的に、燦爛として繼承せられて來たのである。けれどもこれはこの國民に限つてユニークなものであつて、概して淺薄なヒューマニズムや、マクス・シュティルネル〔Kaspar Schmidt〕の無政府的個人主義の揺籃に育て上げられた西歐人、殊にユダヤ人間には、想像にだも絶した情操であるに相異がない。これ等の人民に對し、落下傘降下戰術のやうな犠牲的行動において果敢なるもの有らしめようとすれば、どうしても强制の必要が――かなり峻嚴な强制の必要が、端的に認められてゐるのは必然である。ソヴェート社會主義的共和國聯邦の如きは、それの最も適切な見本といふべきであらう。社會主義と銘は打たれてゐるが、「ボルシェヴィーク」は「自由の王國」に逍遙するかはりに擧げて奴隷的勞働者と成り下り、おなじ國民中の第一人者たとへばスターリンの如き人物の意欲のゆくがまゝに、その肝腦を地に塗らせてゐる[6]のである。そしてほんの僅かでも不滿の色を表現するはおろか、不滿の心を包隱してゐると疑はれたが最後、立ちどころに「壁へ押しつけられ」、殺戮の恐怖時代が現出すること、曩日の狀勢に見るが如きものがある。

これは確かに、惡しき意味における亞細亞的のものであらう。亞細亞的のものであるが故に、內に對する壓逆は外に向つての侵略となつて轉形する。ソヴェート聯邦にして空軍の整備が達成し、その「時期が到來すれば」とL・シュッテルは、その「赤色勞農陸軍の空軍部隊[7]」と題した論文を結んでゐる。「アッチラの時以來、未だ曾て反覆せられなかつた試み、即ち亞細亞人が歐洲に向つて、その法律を押しつけるに至るであらう。これに對し、獨逸の國家社會主義指導者は亞細亞的ボルシェヴィズムスに依つて脅威を受けてゐる歐洲に、固有の理念である歐洲思想を喚醒せしめようとして苦心してゐる。そして歐羅巴の、即ちソヴェートの星の併合よりは分離せるものゝ不撓の自制意志――即ち〈katalaunische Prinzip〉――は、カタローニア平野に捲き起される第二回世界大戰を持ち堪えることが出來るであらう」と。

この第二回世界大戰に登場するものは、問題の「落下傘降下部隊」である。それは、しかしながら人口稠密なカタローニアの平野において、果して如何ばかりの實踐的價値を發揮するであらうか。その解答は、擧げて明日に保留せられてゐるのである。

5) Vgl. 〈Fallschirmwesen in Frankreich〉 ――Luftwehr Bd. 4—N. 5.

6) Cf. "The Flying Bear" by R. D. Hudson. ——The Aeroplane, December 30/1936

7) 〈Die Luftstreitkräfte der Arbeiter-und Bauern-Armee〉 ——Luftwehr, Bd. 4—N. 2

補遺——最近、レニングラードのキーロフ修養・休養公園に「パラシュート・カタパルト」が建設せられた。それ以後、同カタパルトより四千回にわたるパラシュート「飛躍」が實行せられてゐる。使用者、一時間に七十名。同カタパルトは平面に回轉する强馬力の螺旋推進機から成立し、推進機の上に金屬製格子があつて、飛躍者はその上に佇立する。螺旋推進機は驚くべき上昇氣流を起し、特別工夫に依つて製作せられたパラシュートをふくらませ、上昇氣流の强さと、飛躍者が下方に引き付けられる重力と平均する點まで高昇させる。この點を「天井」と稱し、その高度は飛躍者の體重と發動機の力とに依つて一樣でない。大體パラシュート・カタパルトは人間一名を、空中八十七ヤード内外の高さ〔約四十四間〕まで拋り上げる。かくて「天井」に達したなら、この高さは、またその都度の氣流の力に依つて定まる。落下傘は發動機から發する上昇氣流の圏外に出でて下降を初め、飛行機から飛躍した場合とおなじやうに着陸する。この方法で初めての者も落下傘取扱の技術を納得するのである。〔The Illustrated London News April. 1937.「グラフキック」として——〕

■

「落下傘降下部隊」は、要するに空中——地上部隊〔歩兵〕の合作に依つて試みられるゲリーラ戰術を大規模ならしめ、そしてこれを組織化したものに外ならない。したがつてそれの指導原理・戰技・資材及び裝備等に至りては特殊の考慮が必要とせられ、ソヴェート聯邦及びフランスにおいては、それ〳〵獨立機關が設置せられ、それの完成に專念してゐる。戰時、この部隊の行使に就ては、實踐上及び技術上の諸問題が數多く横へられてゐるけれども、兩國ともに未だ殘りなくこれを解決し切つてはゐないのである。

民族性に、朗かなラテン的と、陰慘なユダヤ的との對立が認められる。朗らかなラテン民族であるフランス人は「口頭で、或は書面を以つて、落下傘降下を餘り喜んでゐない〔nicht mehr zu scherzen sei〕とふことを表現してゐる」のも當然であつて、勢ひ、この部隊の要員を志願兵制度に依つて採用しなければならぬ結果となる。またフランス政府の發表に基くと、落下傘

降下塔の利用は、スポートとして多大の效果が期待せられてゐるのにも拘はらず、それの方法的組織化には若干の時日を要し、こゝ「數年後ならでは、ソヴェートロシアに於けるやうな良好の結果を得るに至らない[1]」と告白してゐるのを以つて見ても、これはユダヤ人獨特の產物であり、またその人種性に好適してゐる戰技であることが判るであらう。

1) 〈Die Fallschirmtruppe eine gefährliche und gefürchtete Waffe〉 Von Major André Langeron. ——Luftwehr, Bd. 4. N. 8
「落下傘降下部隊」に「危險な、そして恐るべき武備」といふ、やゝ臆病な形容を付してゐる——未だ實戰に行使せられないのに、また技術上に未解決の問題が存在してゐるのにも拘はらず、そのイデオロギーだけを聞いて脅迫感念に捉はれるのは、さすがにラテン的であつて笑止である。

A・ランゲロンは、勇ましくも述べてゐる、「落下傘降下部隊には特に強い、そしてまた危險千萬な訓練を施さねばならぬ。あらゆる場合において、これを眞面目に考へると、たゞ犧牲を期するのみである」と。從つて「落下傘降下部隊及びそれに對する防禦部隊の人員は、最良者の內の最良者でなければならず、卽ち世界大戰中に驍名を馳せた〈Corps Francs〉に匹敵するものであることを條件とする[2]」のである。それ故に「落下傘降下部隊」は「挺んでゝ、大なる精神力〔die grosse seelische Kraft〕を必要とする。——落下傘降下部隊の、特にこの形而上學的側面を詳述せるものはガイル大尉[3]である。大尉の所說は、この新設部隊の操典ともなり、なほ一層の發展が豫期せられてゐるものである。

2) Op. cit.
3) アヴィノン落下傘學校校長、同校練習部隊司令官。以下引證するところは、前揭〈Die Fallschirmtruppe……〉の紹介に依る。

「落下傘降下部隊は、〔降着後〕散亂せしめられ、部隊の一部を、場所に據つては再び集結困難ならしめる。それ故に『航空市民兵』〔Luftlegionär〕は個々として、〔一部隊の〕代理者となり代つて戰はねばならぬ。それで『航空市民兵』〔落下傘降下部隊〕に對しては、敵地において執る

べき個々の、乃至は團體的の各戰技を、共通に訓練しなければならないであらう。

「個々としての場合には、高い素質のかず〳〵を一身に集中してゐねばならぬ。これは卽ち勇氣と、智識と、犧牲的精神と、そして生理的抵抗力とである。彼は、自分の拳を振つて押し進まねばならぬ。そして委せられた範圍において、獨自の行動を執らねばならぬ」と。

4) A・ランゲロンは志願に依つて「落下傘降下部隊」に入り、犧牲的行動をなすものゝ名譽を表示しようがため、特權と、特別の服裝と、俸給及び名稱とを附與すべきことを說き、「防空兵」〔Fantassins de l'air〕の稱は不適當であるから、古代ローマの精兵に倣つて「航空市民兵」〔Légion Aérienne〕の稱を選擇した〔op. cit.〕。——卽ち〈Legion〉はラテン語の〈legio〉より出づ。ローマの「レヂオ」は特に市民階級から徵募せられたもので、四、〇〇〇乃至六、〇〇〇人の重步兵〔輕步兵、また或る時代には騎兵一小部隊を含んだ事もある〕を一單位となし、他の第二級軍隊〔auxilia〕より區別せられ、最良の典型的ローマ兵であつて、又最も信賴すべきものと目せられてゐた。ところが近世になつて意味の轉換を來して、外人部隊の如きものを指示することゝなつた。ナポレオン戰爭の時、英國においてハンノーフェル人その他に依つて組織せられ、半島戰爭で特に有名になつた軍隊〔King's German Legion〕が、〈corps d' élite〉として知られるに至り、ラテン語通りの意味が復活せしめられた。〔Cf. Ency. Brit. Article 〈Legion〉〕。

「それで『航空市民兵』は、相手國の言葉に通ぜねばならず、自動車・貨車等の運轉法も心得ておかなくてはならぬ。彼等は泳ぎ、飛び、走り、また攀ぢ登ることを必要とする。或は電話・無電に依つて十分な報告に攝受せねばならず、敵地域內にありてはこれ等の方法に基き、彼が使用し得られる限りの、あらゆる補助機關を利用して自分の任務を防衛し、それの遂行を期しなければならない。

「隊を編む場合、『航空市民兵』は步兵武器の使用法や、いろ〳〵の地形に順應せるそれ〴〵の戰術に通曉せねばならないのは當然の事である。

「これ等の諸特質を備へ、それの全體的訓練に加ふるに、落下傘降下の特殊技能を以つてすればわが『航空市民兵』は、眞に特殊の價値を有する野戰型を具現することは明かである。しかるにフランスでは一見、その當然とする尊敬が拂はれてゐないことは確かな一事實である。

「『航空市民兵』個々に該當することは、一層高い段階において、團體にも適用せしめられる。

兵員の選擇には、非常な考慮を必要とするのである。將校に至つては、すべて指揮者たるの素質に加ふるに、特に相手國の地理と習慣とに就いて、深い認識を有してゐなければならない。これは幾回にも亘る旅行に依つて得られるであらう。

「落下傘降下部隊は空軍に屬するか、それとも他の部隊に屬するか。該部隊は、根本的に歩兵戰術を行使せねばならないから、誰でもは先づ、これを歩兵科に歸屬せしめられるように說くかも知れない。けれどもいはゆる「航空歩兵」であつて、飛行機より降着の形式で配置せられるから空軍に密接な支索を繫ぐ。——この方法も、少くともヨーロッパ[5]においては、大した自信の持ち得られないものだ。

「『航空市民兵』の作戰は、むつかしい問題の一聯を提起する。彼は『スカウト』の制服を着用し、いづれの部分でも、迅速に變更し得るようにするがよい。それに大きい上衣の代りに短衣、短いヅボン、若しくは『ニッカアボッカア』、いろんな目的と用途とに順應した各種の帽、武器としては短刀とピストル。

「野戰服の相符合に關しては嚴重な祕密が保たれ、敵地において如何なる場合にありても、敵と見紛ふことが困難ならしめられねばならぬ。最初に各個が祕密を嚴守するなれば、この試みは相當の效果を擧げ得るであらう。」

5) 註二〇參照。

ガイル大尉は、論をすゝめて說く——。

「例へばフランス兵[6]の一團が、突如としてモーゼル河鐵橋を破壞し、空中無防備の箇處を突破してその工作を進めて來るのを發見したとするならば、われ等の驚きは大したものであるに相違がない。如何に驚きが大きくても、すでに時は遲いのである。

6) フランス内地に落下傘降着を完了した敵兵が、素早くその着衣を脫ぎすてゝ、フランス兵の服裝をしたものを指すのであらう。

「アヴオールド襲擊において、余は首要問題の主たるもの、いはゞ『航空市民兵』の役割に屬す

るものに就いて分析して見た。即ち飛行基地を目指し、敵後方の奥地へ降着せしめる事である。

「その追送は、更にわれ〳〵に對して、特別の效果を發揮するに至るであらう。われ〳〵は、これを考察せねばならぬ。その結果は目前に差し迫つてゐる。その問題は、本質的に以下の如きものである。――戰爭の當初『航空市民兵』の一隊は、特殊機械化師團が目標とする攻擊面の前方十五粁乃至五〇粁の地點に降下せしめられた。かくして該降下部隊は、敵を背面より强く攻擊しその行動を阻止することが出來る。その後、該降下部隊は再び、前進せる友軍部隊と合一するであらう。若しこの攻擊が失敗に歸すれば、該部隊〔降着した〕は再び獨特の手段〔追送〕に依つて强化せられ、その目的を達成するに至る。

「落下傘部隊及び航空步兵を行使するのに、實質上、多大の困難の隨伴することは、何等疑ふべき餘地がないのである。實行に當りて僅少の過失でも、忽ち該部隊を全滅に導き、或はその戰鬪力を、更に永い平和期を通じて保たれて來た全緊張をさへ、無駄であらしめる程度に沮喪せしめるに至るであらう。

「失敗と全滅とは、兵員・機材の選擇と價値とに依つてのみ、回避せしめることが出來ないのである。それは部隊の戰術的組織を以つて回避せしめられよう。この方面において、兵員は無理を忍ばねばならぬ。

「自分の私見としては、部隊を大ならしめた結果、各兵員に對し、一律の規程を强制してはならぬ。第一線に立つて、兵員個々が、それ〳〵イニシアティーフを執るように心掛けねばならない[7]と信ずる。

7) こゝがソヴェート聯邦と相異なれるフランス理論であらう。――それだけ個々のモーラル〔志氣〕に倚賴するところが大きいのである。

「それで自分は、六、七名の將校と、十五名の下士官と、それに兵五〇名内外とより成る小部隊にして、輕快にして高い獨立の訓練を受け、すべてを嚴秘に付し、そして地位變更の高い能力を具備せるものを可なりとする。

「何等公然の進軍もなければ、一回だけの猛擊とてもない。たゞ各兵員の强力な作業があるのみ

であつて、これが凡てを決定するに至るのである。

「萬事がこの要求に叶へば、その時、落下傘降下部隊は、立ちどころに危險にして恐るべき兵力と化するであらう」と。

ガイル大尉は、落下傘降下部隊の規模として、上記のやうな小部隊を適切なりと認めてゐる。この人數の小を補ふものは何か。それは「志氣」である。――「志氣」が如何ばかり兵力に作用し、數量上における或る程度の缺陷を償還し得て餘りあるかは、ベルンハーディ[8]の言葉に徵しても明かなるところ。即ち「或る場合、志氣のみが他の缺陷を補ふことがある[9]。それに獨り卓越してゐる人物の感化力が、全軍隊の、乃至は全國家の一般能力を相當の程度にまで振起する……[10]」と道破してゐる。

8) フリードリッヒ・フォン・ベルンハーディ〔1849―　〕は獨逸の軍人にして著述家。一八四九年十一月二十二日、外交官の息子として、聖ピータアスブルグに誕生。普佛戰爭の時、獨逸陸軍に入りそのアタシェとしてスイス國ベルンに駐在。その後、ベルリン參謀本部にあつて歴史部擔當。一九〇七年、第七軍團長に補せられたが翌々九年辭任し、專ら軍事問題の著作に從事す。トライチュケの說に從ひ、戰爭は避くべからず、獨逸は征服するに非ざれば滅亡する、故に如何なる犧牲を拂つても、獨逸は勝たねばならない事を力說す。外國にむかつて宣言せられた彼の「力の福音」〔Gospel of Force〕說は、實に獨逸は侵略的ムードを有してゐる、と信ぜしめるに至つた一要素であつた〔多少は誇張せられてゐるが――〕。彼の主著は〈Deutschland und der Nächste Krieg〉〔1912〕。歐洲大戰當時、彼は東部戰線に從軍したが後西部戰線に轉じ、アルマンチェールの戰鬪に參加。大戰後、〈Deutschlands Heldenkampf 1914―18〉を著す〔1921〕。

9) 例へば一八七〇―七一年に徵募せられたフランス兵が普佛戰爭に際し、數において少いプロシア兵に擊破せられ、或は日露戰爭において、日本が、數において遙に多いロシア兵に連戰連勝した。また米國南北戰爭において、初め南軍は、寡を以つてよく北軍の衆を制してゐた〔以上ベルンハーディ原註〕。さて筆者はベルンハーディの註を補整すべく。更に今次の支那事變や大東亞戰爭に際し皇軍が北支・上海及び南方の各地域において數倍の敵に對し、壓倒的勝利を獲得してゐる事實を、かゞやかしくもこゝに追記するであらう。

10) Gustave Le Bon 所引。Cf. 〈The Psychology of The Great War〉 p. 300.

寡を以つて衆を制しようと目論見る「落下傘降下部隊」は、たゞ「志氣」を以つてアルファとする。また「志氣」を以つてオメガともする。それで「志氣」の一筋に依つて行動せねばならない「落下傘降下部隊」の戰技は、少くともフランス理論に從ふと、他のいづれの兵種にも未だ曾て見られない一種獨特の「野戰型」〔Kämpfertyp〕を示現するであらう。この型は下部構造としてそれに適應せる獨自の飛行機・落下傘及び輕火器を必要とするとゝもに、それの上部構造となるものは、他に匹儔なき「勇氣」〔Mut〕・「知識」〔Intelligenz〕・「生理的抵抗力」〔physische Widerstandskraft〕及び「犧牲的精神」〔Opfergeist〕等を綜合する「志氣」である。「志氣」の缺くべからざる因子である「犧牲的精神」は、中世紀、歐洲大陸を支配した理想主義的觀念哲學の苗床に育成せしめられたものであつて、自個犧牲を通じて神に再生し、善を直接完成し、理念を葛藤なくして體現し、その傍に「美」と「悲劇」との誕生を見定めたのである〔モリツツ・カリエールの說〕[11]。自個犧牲を核心とする「落下傘降下部隊」の戰技に關する限り、別してそれがフランス理論である場合には、多かれ少かれ個々の自由意志を是認し、これを出發點として操典の全幅を展開し來つてゐるのであるから、幾分かは理想主義的哲學の色彩が具現せしめられてゐるのを看取することが出來る〔Das Tragische gehört also der Sphäre des freien Willens an〕。しかるに人間の自由意志なるものを肯定せず、たゞ强制を旨とするマテリアリスト〔ソヴエート聯邦〕のそれに至りては、ひたすらに陰慘な外貌を呈してゐるのである。その自個犧牲は「美」と「悲劇」との誕生を約束してゐるやうな燦爛たるものではあり得ない。むしろ「ヴアルハラの宮殿」で鬪爭と淫樂とに耽り、屠殺せられた人命を喜び迎えるといふ勝利と死の神「オデイン」[12]に捧げる人身御供の類であつたかも知れない〔!〕。

11) Moritz, Carrière, Aesthetik. Erster Theil, S. 177.
Wo er den Göttlichen sich hingibt und durch das Opfer seiner Selbstsucht in das Göttliche eingeht, im Göttlichen aufersteht, da vollendet sich unmittelbar das Gute, seine Idee erscheint widerspruchlos verwirklicht, und es ist die geistige Bedingung des Schönen gegeben.

12) Odin 若しくは Othin に綴る。——北歐の恐るべき神であつて、獨眼の老人の姿をなし、「ヴアルハラ」〔Valhalla〕の宮殿に住して、人身御供を待ち設けてゐる、と信ぜられてゐた。その性頗る

擊滅の哲學

殺伐であつて戰ひを好み、自分を信奉する者には勝利を與ふ。この神は曾てスエーデン國を鐵めてゐたといひ、またチユートン及びアングロサクソン民族の軍人社會には相當の信者があつた。トール及びバルダア神はオデインの子である。

（出版會承認
ア481021号）

擊滅の哲學

不許復製

昭和十八年六月二十日初版印刷
昭和十八年七月二十日初版發行　（三、〇〇〇部）
定價㊎金貳圓七拾錢
特別行爲稅相當額拾四錢　合計金貳圓八拾四錢

著者　多田憲一（ただけんいち）　東京市本所區東兩國一丁目十六番地
發行者　佐藤欣一郎　東京市本所區東兩國一丁目十六番地
印刷者（東三三六五）佐藤欣一郎　東京市本所區東兩國一丁目十六番地
印刷所　一文社印刷所　東京市本所區東兩國一丁目十六番地
發行所（會員番號一二〇一〇〇）東文館　東京市本所區東兩國一丁目十六番地

（九ノ二町路淡區因神市京東）社會式株給配彦出本日　元給配

969
31